

始

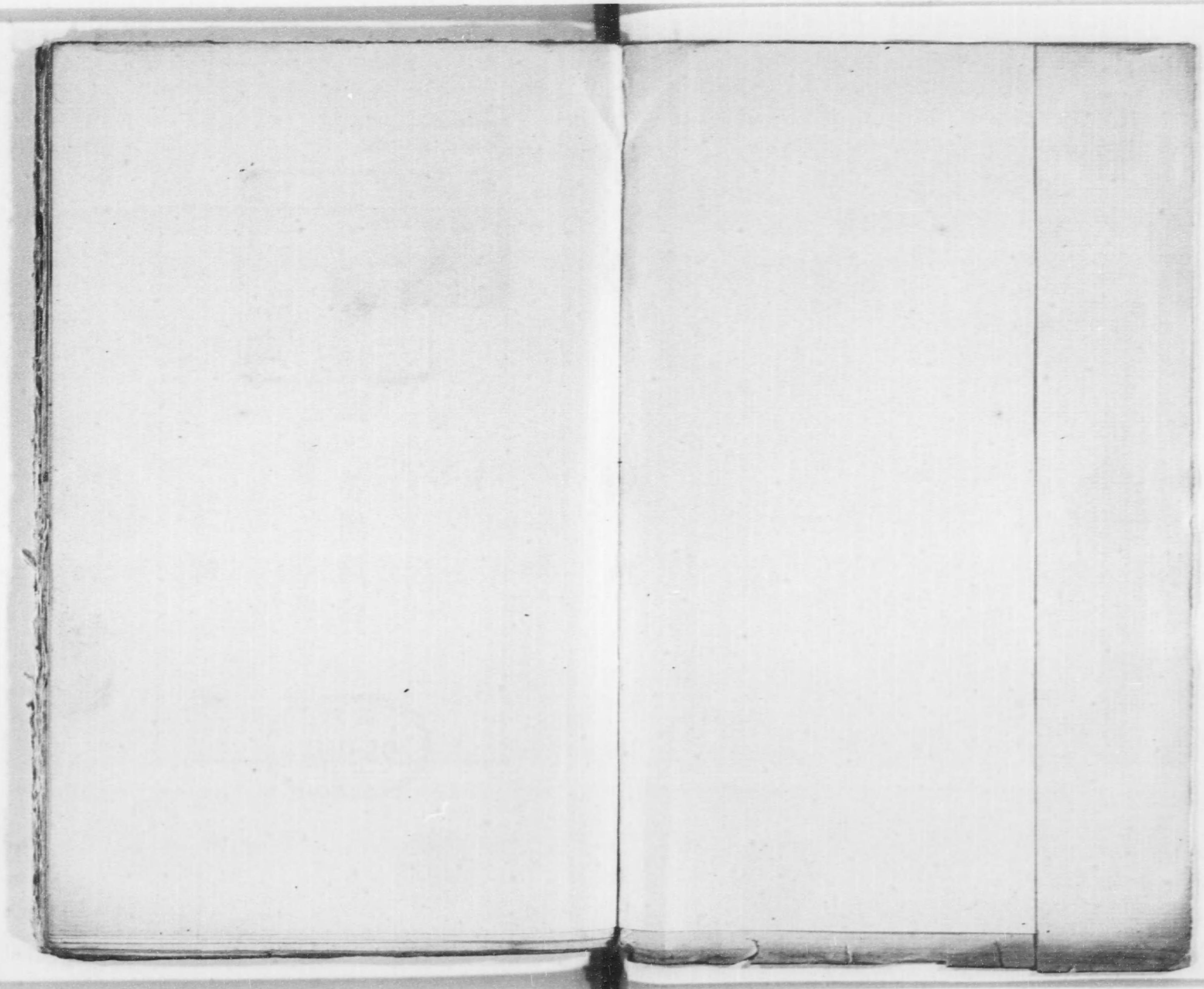


デー・ジノールワイエフ著  
富士辰馬 譯

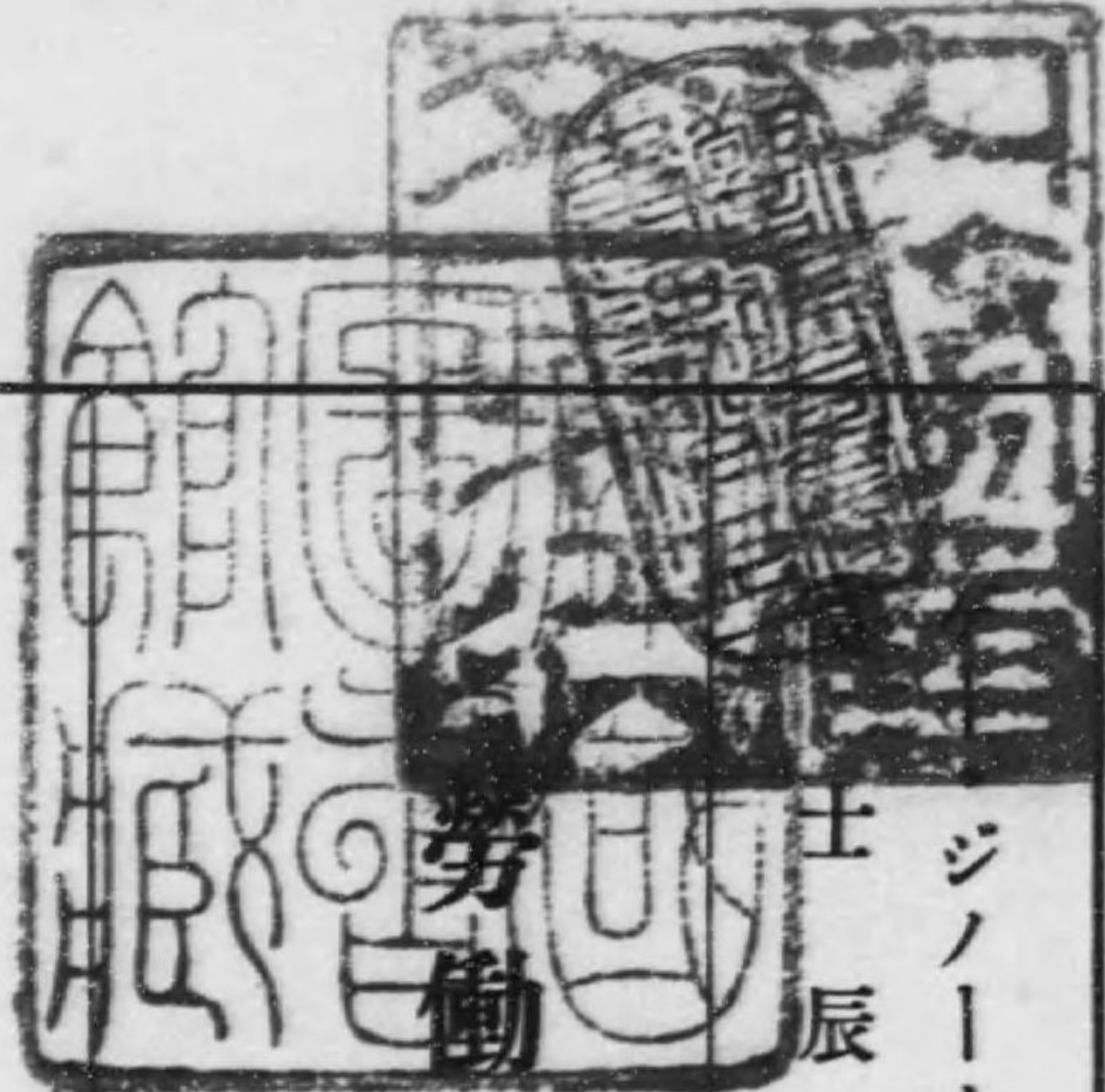
労働黨と労働組合

「労働組合の中立主義に就て」

改造社 版



特113  
710



ジノールウイエフ著  
士辰馬譯

# 労働組合と労働党

「労働組合の中立主義に就て」

大正  
13.11.20  
内交

改  
造  
社  
版

## 序 言

茲に集録した諸論文は一九二二年より一九一四年までベトログラードの「ブラウダ」に「メタリスト」に掲載されたもので、その頃、芬蘭の新聞に譯載されたものである。單行本としてはラトウイヤの同志達によつて出版された。が、組合運動に従事してゐる諸友人の薦めに従つて更に之をロシア語で單行本として上梓することにした。

今や組合運動の懸案は云ふまでもなく異つてゐる。現在、著者が之を如何に見てゐるかは、一九一八年の初めベトログラードで開催された労働組合第一回全露會議の決議に依つて讀者は判斷し得ると思ふ。この決議は私の起草に係るもので、該會議の報告に於て獲得したものである。私はそれを附録として茲に掲載することにした。本書が今や非常に複雑な責任ある懸案の前に立つてゐる我が組合運動家に何等

かの利益を齎すものならば著者の全く満足する所である。併し評論の或る部分特に  
獨逸労働運動に関するものは今では私にも陳腐になつたやうに思はれるここをお断  
りして置かなければならない。

一九一八年四月九日

ペトログラードにてゲー・ゼー。

# 目次

第一章 組合運動の原則的諸問題……………一

一、マルクスミ中立主義……………一

二、中立主義の三形態……………一〇

三、獨逸に於ける中立主義……………一七

四、政治的中立と政黨的中立……………二六

五、中立主義と「インターナショナル」……………三九

六、我々の題目……………四九

第二章 ロシヤに於ける組合運動……………五九

一、最初の歩武……………六九

二、一九〇六年及一九〇七年.....	六
三、倫敦決議の前.....	六
四、倫敦決議.....	六
五、我が中立派の災厄.....	九
<b>第三章 労働組合</b> .....	一〇七
一、労働組合は何ぞや.....	一〇七
二、労働組合は何によつて生きるか？.....	一一九
三、労働組合は労働者に何を與ふるか？.....	一二三
四、労働組合ミ相互扶助.....	一二六

## 第一章 組合運動の原則的諸問題

### 一、マルクスと中立主義

最近の我が組合運動には、無論、多少の活氣が見られる。最も困難なる時代は既に過ぎ去つたやうである。よかれ悪しかれ我が組合運動は凡ての障害を處理し、完全なマルクス主義の精神に於て健全なる發達の正道にある。

工業部の集めた報告に依るに、一九一一年にロシアには五百十四の労働組合があつた。その年一杯に三十五の新組合が登録され、五十二の組合が閉鎖した。之が爲に一九一三年の初めに登録されてゐた組合は全ロシアを通じて四百九十七であつた。五百の労働組合は云ふまでもなくロシア全體に取つて大海の一滴である。だがこの數字はどんな力を以てしても、こんな壓迫を以てしても、労働者の組合組織に對す

る要求を撲滅することが出来ないといふ事實を示してゐる。

労働階級は復活した、そして何事に拘らず労働組織もその諸形態に於て更生したのである。組合運動の更生に關聯して該運動の原則的諸問題に對する興味も更生した。諸組合も亦新しい若い労働活動者の世代を以て満たされた。理念的生涯は茲に送り出た。是等の活動家はロシア及國際生活の重要な社會政治問題の一つからも離れてはゐなかつた。況や彼等の組合運動そのものゝ重要な問題に對する興味は非常なものであつた。

組合運動の最も重要な原則的問題の一は労働組合の中立に關する問題である。或は労働組合と労働階級の政黨との間の相互關係に關する問題及一般に労働組合の政治に對する態度に關する問題である。

中立主義に關する問題は労働組合と政黨との關聯の形式に關する問題であると思ふのは誤りである。寧ろこの問題は無産階級の全解放運動の根本問題と密接に關聯

する遙かに深刻な問題である。中立主義を圍繞する議論が多くの國に於て戰略的爭論の中心となつたのは宜なる哉である。以下の諸論文に於て我々はマルキストが日和見主義と名づくる見解の全體系と中立主義との關聯を詳論したいと思ふ。

中立主義の味方は多くマルクスの權威の蔭に隠れやうとする。マルクスの「批評家」が自己の正しからざる論證をマルクスの名に依つて好んで支援するのは永い間の習慣である。これはマルクスの味方や不正系の味方から爲されたマルキシズムへの不本意な貢物である。マルキシズムの理念は現代労働運動の肉と血に入り込み、我が偉大なるカール・マルクスの名は、マルキシズムに拮抗して戦ふことにすらもマルクスの名を藉りる程に労働者の間に大なる權威を收得するに至つたのである。フランスのサンチカリストの云ふこゝちや是等の清算派（譯者註、メニシエウイキを指す）の云ふこゝちは裏返しに聞くがいゝ。彼等の言に依れば、彼等こそはマルクスの遺訓を固守してゐるのである。我がロシアに於ては嘗に清算派のみならず、ツガン。

バラノフスキイやイズゴエフなどの自由主義者までが「マルキスト」名告りを掲げてゐるのである。是等は嘗てマルクスが自身でそれが「マルキストなら僕は、勿論、マルキストの數には屬さない」と云つた種類のマルキストである。實際にカール・マルクスは労働組合の中立主義に賛成したことは嘗てなかつたのである。彼は労働組合は政争やプロレタリアットの政黨に對して無差別的（中立的）態度を取らねばならぬことは嘗て考へなかつたのである。

三四十年前には何處でも今日ほど階級的矛盾が熾烈でなかつた。労働階級の道、その目的、その方法は今ほど明瞭でなかつた。だがマルクスは労働組合は中立的であり得ないし又中立的であつてはならぬことを炯眼を以て既に洞察してゐたのである。他の諸問題に於けるに等しく、マルクスは此の問題に於ても既に五十年前に今日までも尙且正しい線を認めてゐたのである。中立を墨守する日和見主義者はマルクスが中立主義者であつたかの如き傳説を裏書きする爲に恰もマルクスの言であ

るかの如き一つの聲明を好んで引用するのである。即ち「光線」は、つい先頃、マルクスが或る通信員への答へとして次のやうなことを書いたかの如く讀者を信ぜしめてゐる。「組合は如何なる政治團體にも決して合體してはならぬ、或は之に従屬してはならぬ」。「光線」一三五號、恰もマルクス自身から引照したかのやうなこの「引用文」は決して新らしいものではない。自由主義者のトトミアンツ氏はこの文言を基礎としてマルクスが労働運動の問題を自由主義流に理解してゐたかの如くに立證せんことをした。この架空な引用文をプロコポフ・ウイツチ氏も引照し、十月黨員のプロトボポフも第三議會の演壇から「社會民主主義の使徒たるカール・マルクスも機械工組合へ送つた書簡中に労働組合は如何なる政黨とも結合し或は之に従屬せしむべからずと言つてゐることを告げれば充分である」と説いたものである（速記録九五八頁）。所が實は、讀者よ、十月黨員のプロトボポフも自由主義者のトトミアンツも清算派の「光線」も事實を穿き違へてゐるのである。十月黨員や自由主義者は狭隘な階級的利



己心から右の穿き違へをしてゐるのである。だが實際にマルクスはそんなことを書きもしなければ言ひもしなかつた。かういふことがあつたのだ。獨逸の金屬工組合の會計員が四十餘年前にマルクスと會見したことがある。この會計員が(ヘデマンといふ名の)或る論文中でマルクスが上掲の言葉を彼に話したと確言してゐるのである。この會見談はマルクスではなく、ゲマンによつて新聞に表明された。この會見談は獨逸の修正派が力めて利用したものであるが、之に就て例のカール・カウツキイは次のやうに書いてゐる。

「……マルクスの言葉を傳へるに當つて會見者は謬りをするかも知れぬ……この會見は労働組合の政治的中立論の爲に利用されて來た。だが之が爲には何等の根據もない。マルクスは労働組合が自由主義者や尊僧主義者に對すると等しく社會主義者に對しても中立的でなければならぬと云ふ見解を抱持したことは一度もなかつたのである。」

このカウツキイの言葉に對して「光線」は何と言ふだらうか？ この新聞は時としてカウツキイが自分達に取つて權威であるやうな風をするではないか。「光線」の編輯者はカウツキイのこの言葉を知らぬことはあるまい。何故に彼等はカール・マルクスの意見を贗造するのであるか。だが興味あるこの問題に對するマルクスの本當の見方はどうであつたか。幸ひにも之に就てはマルクスでない者が表明した會見談よりも重味のある有効な歴史的記録が存在してゐる。

一八六五年六月二十六日マルクスは國際労働者聯合總會に於て賃銀、價格及利潤に關する報告を朗讀した報告を結論として彼は三箇の根本項目を提出した。即ち第三項目の終りにマルクスはかう書いてゐる。

「労働組合は若しも制度を變更する爲に働かず又その組織された力を労働階級を根柢から解放する爲の即ち労働雇傭制を完全に廢棄する爲の槓杆として使用せず、單に制度の結果に對する戰爭のみに局限されるならば、その組合は本來の使命から退

却するものである。」

「光線」紙の諸君よ、これは諸君の中立主義に似てゐるだらうか。有名な「哲學の貧窮」といふ著書に於てマルクスはかう書いてゐる。

「この争闘に於て（労働組合の賃銀引上其の他の爲の）——眞の公民戦に於て來るべき運動に必要な諸要素が結合され發展するのである。一度びこの點に到達せんか聯合は（今様に言へば労働組合）政治的性質を獲得するものである」（ロシア版二二八頁）  
組合が政治的性質を獲得する！ これは中立なごゝいふものに似てゐるだらうか？

一八六六年ジエネヴァ會議に於て採擇され、マルクスの筆になつた決議の中に曰く

「労働組合は今日まで直接に資本との地方的衝突にその注意を集中し過ぎた。労働組合は雇傭奴隷の全制度及現代生産方法に對する争闘に於ける自己の全意義を未だ

充分に理解してゐない。それ故に一般の社會的及政治的運動から餘りに遠ざかつてゐる……組合はこの目的に（労働階級の完全な解放に）導く一切の社會的及政治的運動を支援しなければならぬ。」

借問す、この決議は日和見主義的中立主義に正反對なるマルクスの精神を以て育まれてはゐないだらうか？ 「光線」の「マルキスト？」諸君よ！ 返事をして呉れ給へ。

この問題に就て意見を述べてゐる通り、マルクスは労働組合の中立に反對して立つたのである。今や讀者は眞正銘の記録に依つてこれを信じたであらう。

右の資料は、勿論、孰れの見地が正鵠なるやの問題を盡してはゐない。各社會民主黨員が労働階級の大先生たるカール・マルクスがこの問題に就てさう考へてゐたかを第一に知らうとするのは當然である。だがそれだけでは尠い。我々は最近數十年間に於ける國際労働運動の豊富なる經驗がこれに就て何を語つたかを攻究しなけ

ればならぬ。

## 一、中立主義の三形態

カール・マルクスは、既に述べた如く、舊プロレタリア・インターナショナルの最初の踏出しに際して既に労働組合の中立主義を排斥した。雄大な労働運動發展の四十年の経験を積んだインターナショナルに於ける形勢はどうであるか。

労働組合の政黨及政治に對する態度を見れば、現在のインターナショナルは次の三群に區分することが出来る。

第一群。此處へは英國、米國、一部分は濠洲、佛國及伊太利が入る。此處では孰れかの様式に於て中立主義が主位を占めてゐる。此處では労働組合の大部分は社會民主黨と密接な聯繫を持つてゐないのみか、往々にして之に敵對してゐる。

第二群。此處へは德國、白耳義、スカンヂナヴィヤ諸國（丁株、瑞典、諾威、芬

蘭）が含有される。此處では中立主義は足下に殆ど何等の地盤をも持つてゐない。

此處では社會民主黨と労働組合との間に最も密接な組織的の聯繫が存在してゐる。

第三群。第一素には獨逸が立つてゐる（一部分は瑞西も加入してゐる）此處では米國及英國に於けるとは異なつてゐるが、割合に永い間、中立主義が跋扈してゐた。

けれども最近數年間に於て中立主義は漸次に亡びて行つて、社會民主黨と労働組合との聯繫は益々密接になつて行く。政黨と組合の聯繫の點に於てこの第三群は益々第二群に近づいて行く。

運動の全く若い諸國（ロシヤ、巴爾幹諸國など）に關してはキツパリと自己の途を擇んだとは言へぬ。兎に角、是等の國は中立主義の國とはなり得ない。現在に於て是等の國は社會民主黨と労働組合との間に密接な聯繫のある第二群への途上にある。

誤解を避ける爲に、上記の分類は組合の中立が社會民主黨との密接な聯繫といふ一つの兆候によつて作られたことを更に強調して置く。それ故に各群に於て我々は

修正派と並んでマルキストを見、トレード・ユニオニストと並んでサンチカリストを見る。更に進めば、修正派の中に我々は中立主義の反対者を見ることもある言ふであらう。無論、正確に言へば、修正派は中立に賛成してゐるけれども。

個々の國に於ては経験と實際とが修正派をして中立主義の害悪を悟らしめるに至つた。その代りに正統派マルキストの中には今や全インターナショナルに於て中立主義の味方を更に見ない。外國に於けるマルキストは組合と政黨の密接な聯繫を主張してゐるのである。

上記の三群を管見するも、組合と政黨の最も密接な聯繫を有する第二群は殆ど悉く比較的勞働運動の若い國々を包括してゐるのである。與へられたる國に於て運動の開始が遅ければ遅い程、その國はそれだけ多く他國の経験を參酌し、それだけ多くその運動は全世界に於ける階級的矛盾の亢進に遭遇し、それだけ中立主義への傾向が少ないのである。スカンヂナヴィヤ諸國の例は特記すべきものである。此處で

は比較的遅く運動が開始された。その最初に於て自由主義的ブルジュアは(例へば芬蘭に於て)勞働運動を抑壓する爲に痙攣的努力を試みた。社會黨は自由主義的勢力から勞働者を解放する爲に頑強な運動を行はなければならぬ。運動は忽ちに激甚となる。中立主義の餘地はない。然るに正統派マルキシズムの理論は此處に於て全く主位を占むるものではない。

勞働運動の進んだ國々に於ては年々共に益々多く價値の再評價が行はれる。

獨逸は勞働運動に於けるマルキシズムの影響が大きい爲に、眞つ先に中立主義の痕跡から離れやうとしてゐる。そして佛國に於ても、英國に於ても中立主義の反対者が數を増しつゝある。

既に陳べた如く、中立主義にも相違がある。第一群はサンチカリスト的及トレード・ユニオンの二小群に區別される。これは中立主義の二態である。中立主義の第三態を呈するものは最近に於て獨逸に見られ得るものである。

サンチカリストは悉く組合の中立主義に賛成するのみならず、異つ向よりプロレタリア政黨の必要を否定する。彼等の標榜は組合が凡てであつて、政黨は零であるといふにある。サンチカリズムの中にも「革命的」及「改革的」の二潮流がある。前者は佛國に、而して後者は伊太利に優勢である。尤も兩潮流は兩國の孰れにも見られるけれども。

サンチカリストは凡ての分派に於て労働組合の絶對中立に賛成してゐる。だがこれは彼等が如何なる政治も行はぬといふことを意味するものではない。彼等は獨特のサンチカリスト的「政治」を行つてゐる、それと同様に自由主義的中立主義者も組合にその自由主義的政治を強制することに反對しない。

中立主義者の第二小群を構成するのはトレード・ユニオニストである。此處には米國・英國、一部分は歐洲が合同してゐる。純粹のトレード・ユニオニストは組合と社會民主黨の聯繫などは耳にするこゝも欲しない。少くも、古典的トレード・ユニ

オニズムの全盛期にはさうであつた。古典的トレード・ユニオンは單に労働貴族のみを結合し、高所より無教育な労働大衆を見下し、社會黨及社會民主黨に敵對し、政治に於て自由主義的ブルジュアの單なる癩に過ぎぬ所の狭い組合組織である。

此處に我々は英國に於てトレード・ユニオニズムを育み、米國に於てこれを育んでゐる經濟的原因を闡明してゐる餘裕がない。英國に於ては階級的矛盾の亢進に影響されて舊トレード・ユニオニズムは段々に生氣を失ひ、社會主義に驅逐されつゝある。

トレード・ユニオニズムの最惡な方面は今や米國に於て最も顯著に現れて、労働組合は(トレード・ユニオン)ブルジュアジャの掌中にある哀れな玩具であるやうな有様である。一九〇八年の大統領選舉に於て、例へば、タフトやブライアンの兩ブルジュア候補は俄かにトレード・ユニオニストだ名告り出した。前者は鋼鐵王のトラストが之を支援し、後者は石油王のトラストが之を支援した。だが選舉前に至

つて彼等は労働者を購着する爲にトレード・ユニオンの首領の支援を手に入れ、それから民衆の集會に於て組合員の徽章を引き出して、「同志よ、諸君も同様のトレード・ユニオニストを信頼せよ」と叫んだものである。

ブルジュアの悖徳は此處まで到達してゐるのである。そして米國のトレード・ユニオンには、一九〇八年と一九一三年に労働者の大衆が、この組合の組合員が社会主義者に反對して鋼鐵王の候補者に投票したと同様の精神が跋扈してゐるのである。極く最近まで米國の中立的トレード・ユニオンの會長はサムエル・ゴンバースであつて、彼は同時に主人達の組織の副會長であつた。米國に於ける中立主義は斯くまでも擴がつてゐるのである。三年前にゴンバースが歐洲へ來て、修正派の中立主義者が彼を稱讚し始めた時に、カウツキイはその光輝ある論文中にこの中立主義者の風手を描寫し、よくお出で下さつた、労働組合の名譽ある會長さんよ、主人達の組織の副會長殿よと中てこすつた。

サンチカリストとトレード・ユニオニストの中立主義は右の如きものである。

この、中立主義の兩態様はロシヤでは大した味方を持つてゐない。その代りに第三の態様は、即ち獨逸に榮えた中立主義は多くの味方を持つてゐる。この、中立主義の第三の型は特別の注意に値ひする。

### 三、獨逸に於ける中立主義

英、米(トレード・ユニオンズ)及佛伊(サンチカリズム)の中立主義が労働階級の利益を喰ひ違ふことはブルジュアの陣營に屬せざる我がロシヤの中立主義者が承認する所である。獨逸の中立主義は別物である。

獨逸に於て中立主義を名づけられるもの、獨逸のマルキスト達は中立主義に對してどんな態度を執つてゐるかをもちよ近寄つて熟視しやう。

獨逸に於ける中立的潮流は九十年代の後半に出現した。カウツキイは中立主義説

の増大した時代は一八九四年から一九〇〇年までである。獨逸に於ける中立主義の發生が労働組合がまだ非常に微かであつた時に屬し、獨逸組合運動の全盛期が——後に説くが如く——恰も中立主義の完全なる敗北を合致することは目立たないことである。

一八九三年のケルン大會に於て中立的論議が初めて獨逸の土壤に響き始めた時に、獨逸に於ける労働組合は僅かに二十五萬の組合員を包括してゐたのみである。即ち現下に於て有するものゝ十分の一だも有してゐなかつたのである。社會主義者に對する特別法が崩壊したのはついこの頃のことである。その當時は單に自由主義的（ギルシ・ブンロフ）及反動的（基督教的）組合のみが自由に存在し得たのである。

社會民主的労働組合は大部分に於て「床下」で働くやうになつた時に、永年の間に失はれたるものを顧えるやうに取返さうと欲した。

既にこの頃に力強いトレード・ユニオンになつてをり、全く特殊な英國の社會經

濟状態のお蔭で労働者に取つて經濟的改善を贏ち得た英國の例は誘惑するものがあつた。一般に中立主義の爲に好都合な地盤を創つた心理的前提は右の如くであつた。

但し、獨逸の中立主義には、自ら二つの方向を區別しなければならぬ。即ち原則的中立主義と純實際的中立主義とに。だが大きな意義を——消極的ではあるが——獲得したのは前者のみである。

原則的中立主義者として出動したのは獨逸の修正派である。方向としての、獨逸の中立主義は修正主義と密接に關係してゐる。一八九八年のシュツットガルトに於ける大會で、我々は既に確然と積み成された修正主義の方向を見る。そしてこの時が獨逸中立主義の全盛期である。原則的中立主義は概して中立主義と同様の根本理由で獨逸に生れたものである。原則的中立主義は、本質に於て、部分が全體に關係する如く、修正主義に關係してゐるのである。修正派は客觀的に小ブルジュア的外來者、社會民主黨の飛び入り、小ブルジュアの知識階級、社會の過渡的階層、プロ

レタリアットの最も遅れた階層の氣持の表現者である。彼等は資本制度は、既に部分的改善と個々の改革に依つて、漸次に且平和に將來の社會へ生へ込みつゝあるに稽へてゐる。彼等は労働黨が平和な社會改革の政黨に造作もなく變換するやうに望んでゐる。

斯やうな見地に立つ人々は、労働組合は政治に携つてはならぬ、組合の全活動は漸次に經濟的改善を得る爲の運動を以て爲されてゐる、組合はプロレタリアットの政黨と密接な聯繫を結ぶべきでない、組合は「餘りに手酷しく」ブルジュア黨に反對すべきでない——約言すれば、組合は冷たからず熱からず「中立的」でなければならぬと稽へる時には全く論理的である。

この原則的中立主義に對して獨逸のマルキストが最も容赦なき戰爭を宣言したことは當然である。カウツキイはマルキストの頭に立つて出動した。有名な修正派のフォン・エルムなどは中立派の頭に立つた。カウツキイは中立主義反對の諸論文に

於て第一にかういふ質問を提出した。

「現在の歴史的形勢に於て労働組合の眞の中立化を獲得し得るに考へられるだらうか？」

そして彼は斷乎として——否、考へられぬ——と答へてゐる。

世界の舞臺に社會民主黨なるものがなく、階級争闘と諸政黨の競争がないならば、労働組合の中立主義も考へられるであらう。だが社會民主黨のないところや階級争闘のないところを想像するは無稽であるから、中立主義の憧憬も同様に無稽である。社會民主主義は之に對して中立的であり得るやうな現象ではない。その間には賛成か反對かあり得るのみである。我々に與するか、我々に反對するかとあり得るのみである。

「労働組合中立化の要求は——ミカウツキイは言ふ——労働組合の組合員を政治的に完全な無辜の状態に保持しやうとする要求へミ變換する……これは中立ではなく



て質朴の政策である。」

「標榜される中立は社会民主党に對する實際の敬意へを變換する……プロレタリアツトが中立政策の仲介に依つて迅速にその目的を貫徹するを主張するはプロレタリアツトが政治的組織を以てするよりも政治的解體を以てする方が迅速に前進するを主張することである……労働組合は、政治に携るに及んで、實際に、或は社会民主主義的政策を遂行するか或は反社会民主主義的政策を遂行しなければならぬ……労働組合は社会民主党に對して單に名義上の中立でない、實際上の中立を墨守し得るものではない。」

眞の中立主義は、組合が我々自らに背くことを欲せざる限り、不可能である。そして中立主義はプロレタリアツトの利益の見地から見望ましくない。組合の中立化はその「絶縁」である——ミカウツキイは言ふ——労働者の勢力を分裂させ之を弱めるものである。労働組合と社会民主運動は二箇の相異なつた運動ではなくて、プ

ロレタリアツトの解放運動といふ同一の運動の二方面である。」

カウツキイは他の述作に於ても書いてゐる——「政黨と労働組合は全く相異なつた活動の分野を持つてゐる——即ち前者は政治運動を、後者は經濟運動を——ミ云ふが如き意見程間違つたものはない。經濟と政治の分離は警察國の政治的虚構である。そんな分離は實際に存在するものではなくまた科學を以て釋明されるものではない。」

「若し労働組合が政治的拘束に依らずに、自家の所信に依つて社会民主的たることを欲せず、ブルジュア諸政黨と争闘を行ふ労働黨に對して無所屬たらんことを欲するにすれば、該組合は既にこの一事を以て労働黨に對し敵國を構へ、そしてそこに効果ある活動の障壁を見ることを指示するものである。」

カウツキイは獨逸の中立派に對して右の如くに書いてゐる。

曩に我々は獨逸に於ける「實際的中立主義」に就て書いたが、之に就ては數言を費

す必要がある。

獨逸の労働組合にはブルジュアジャミ反動派によつて設けられた分裂がある。色々の眞實や不信實を以て支配階級は遅れた労働者の或る部分を切り崩して之を『基督教教的』及自由主義的労働組合にうまく統一した。獨逸社会民主党はこの邪魔に對して斷乎たる争闘を行はなければならない。即ち、或る首領達は、若し社会民主党がその組合に於て社会民主主義を餘りに強調せずして、單に『労働政策』を行ふみすれば、敵の組合の勢力から遅れた労働者を抜き取るは容易になるだらうと思つた。これは疑ひもない誤謬であつた。カウツキイが中立主義の不實現性に就て正しく語つてゐることは悉くこの『實際的』中立主義に當て嵌つてゐる。この『實際的』中立主義は先づ第一に實際的でない。反對者は常にこの、そんなに論理的でない、そんなに男々しくない戦術を摘發した。

無論斯やうな『實際的』中立主義は多くの修正派の中立主義とは異なつてゐる。こ

れはブルジュアジャの有害な影響から早く大衆を抜き取らうとする希求によつて指揮される、よくある實際上の誤謬である。マルキストも斯やうな誤謬をすることがある。眞個に、獨逸の個々のマルキストは、一時、労働組合に於ける斯やうな政策を指の間から眺めやうとしたことがある。

「既に一八九三年に——有名な社会民主主義者シトレーベルは書いてゐる——モルケンブルやペーベルすらも同様の商量を表明した、けれどもこの意見は黨の大多數によつても、労働組合によつても支援されなかつた。」

我々は所謂實際的中立主義に對するアウグスト・ペーベルの同情なるものは酷い誇張であると思ふ。少くもペーベル自身はこの事に就て次のやうなことを新聞に書いた。

「私は或る部分のブルジュア新聞に喧傳され、恰も私が非政治的労働組合を擁護して、或る種の中立主義者でもあるかの如くに看做した私の思想の曲解に對して抗

議しなければならぬ。私にはそんな思想はなかつたし又有り得る譯がないのである。』

兎に角、十年乃至十五年前には獨逸に於ける個々のマルキストが實際的中立主義に讓歩したことは儘かである。生活はこの讓歩の誤謬を示した。獨逸のマルキストは一人としてこの誤謬を學説として擔ぎ上げはしなかつた。個々の人々の斯やうな動搖は小さな挿話として残つた。中立主義を主張し続ける者は修正派のみである。だが階級争闘の進行は彼等の足下からその地盤を叩き出しつゝある。

十年乃至十五年は過ぎ去つた。生活は中立主義の反對派たる獨逸のマルキストに有利なやうに議論を解決した。そして一九一一年にカウツキイは誇らかに次のやうなことを書いたのである。

『若し一八九四——一九〇〇年が中立主義論の成長期であつたならば、その時から中立主義は段々に消滅して、政黨、労働組合は同一であるを宣明する標號を代つ

たのである。

だが獨逸には中立主義が大きな勢力を持つてゐた時があつた。その時にカウツキイは正しく書いてゐる——

『若し我々(獨逸人)に兄弟たる政黨が斯くの如く優秀な諸方面を持つてゐる獨逸の労働運動から最も劣弱な方面になつてゐる方面を借入れやうとするならば、それは莫迦氣たことである。而も社會民主黨と労働組合との間にもつゝ密接な、それ故にもつゝ効果ある聯繫を創る可能があるに於て。』

これは我々がロシヤの中立主義者に取つて眉に迫つた問題ではなくて、眼に迫つた問題である。即ち彼等は獨逸の労働運動からその最も劣弱な方面たる中立主義を借用せんとするカウツキイの所謂『莫迦氣た』計畫を持つて走り廻つてゐるのである。而も獨逸に於ては永年の苦闘によつて中立主義が遂に過高の階梯になつて殆ど根こそぎに死に絶えて仕舞つた時に於て……。

#### 四、政治的中立と政黨的中立

階級争闘が亢進するに従つて、最も廣汎な勞働大衆が事態の全進行を以て益々「政治」に牽き入れられるに従つて、中立主義の味方は終極まで契約された、謂はゞ、恐怖のない、正統中立主義を以前のやうに擁護するこゝが益々困難になつて来る。生活は教へる！ 病膏盲に入つた日和見主義者ですらマルキシズムに讓歩し從來の或る地位を引渡さなければならなくなる。舞臺の上には中途半端の中立主義者が出現する。即ち曾ての如く誇らかにはその旗幟を掲げない中立主義が出現する。

斯やうな中途半端なもの恥かしげな中立主義の種々相の一は、我々は組合が政治生活に参加するこゝに反對ではない、全然政治がなくては組合は濟まされぬ、それ故に我々は政治的中立を主張しない、だが我々は從來の如く政黨關係に於ける中立を斷乎として要求する云ふが如き潮流である。換言すれば勞働組合は政治に携り

るが、この政治は政黨的であつてはならぬといふのである。即ち一は政治的中立で、他は政黨的中立といふのである。

この見地は獨逸の或る修正派が擁護した所であり、又擁護してゐる所である。

「光線」紙に、先頃、クワドラート氏の二小品が掲載されたが、その中で筆者は私に對して論戰を試みつゝ、恰も上述の見地を擁護してゐる。

クワドラート氏は次の事に於て私を詰問してゐる。

「最初にジノウイエフは政黨的及政治的中立は同一物であるといふ出鱈目な思想を以て讀者の頭を叩きつけてゐる……ジノウイエフは政治的中立と政黨的中立なるものゝ理解を故意に混淆してゐる云々……！」

クワドラート氏は自己の見地を次のやうに説述してゐる。

「政治的中立組合は決して存在し得ない、又過去に於ても存在しなかつた。蓋し國家保險、聯立權、勞働立法、選舉權などの問題は悉く政治問題であつて、組合は之

が解決に痛切な利害を有してゐるのである。政黨的中立は別物である。〔圈點は著者の言〕

「光線」の所観は右の如くである。〔「光線」はクワドラート氏に不同意であることは一言も斷つてゐない〕

この所観を檢覈しやう。

斯くの如く、組合は政治的中立を排斥し得る、けれども政黨的中立を承認し得るのである——「光線」の見地からは承認しなければならぬのである。

そこには、先づ、前に述べた如く、一般に斯やうな問題の置き方は、單に紙上に於けるのみならず、生きた現實に於て考へられるだらうかといふカウツキイが提出した重要な問題が起つて来る。「光線」の中立主義者の意見に依るも、勞働組合が「痛切に利害を有する」幾多の重要な政治問題が存在してゐる。「光線」が是等の問題を數へ上げてゐるのは大いに好い！ だが我々は何も數へ上げるほどのことはない。

思ふ。何故なれば、勞働組合が痛切に利害を有しないやうな、大きな政治問題は實際にないからである。だがそんな事ではない。

我が中立派に問はん。選舉權や勞働立法や聯立の自由といふが如き諸問題に於て諸政黨が種々の見解を抱持してゐることは、勿論、彼等も知つてゐるだらう。右黨は或る見解を、自由黨は他の見解を、社會民主黨は第三の見解を。「光線」によつて名づけられた諸々の問題を繞る政争は同時に黨争ではないか。ロシヤが如何に遅れてゐることは云へ、その中には政黨の枠内で既に政争が流れてゐる。即ち、政治的中立を排斥すれば、生きた現實に於ては連綿として政黨的中立をも排斥しなければならぬのである。

—私は諸政黨の全生活がそれを中心として轉廻してゐるそれらの政治問題や政争に對して無差別であつてはならず又無差別であり得ないに於て、私はそれらの政黨に對して無差別で〔「中立的で」〕あり得ない——各勞働組合は自分に向つてかう

言はなければならぬ。そして若し我が労働組合が、例へば國會への選挙戦に際して實際に如何なる行動を採つてゐるかを管見すれば、是等の組合は自分に向つて右の如く言はなければならぬ。

これは當然のことである。然らざれば組合は運動の原頭から立ち退かされるであらう、然らざれば組合はプロレタリアの旗幟に背叛するであらう。

もう一對の例を外國の生活から取らう。

バルカン戦争。ブルガリヤに於ては社会民主党を除く以外は戦争に賛成である。

ブルガリヤ労働組合は戦争に關する問題に於て中立たり得るだらうか。クワドラート氏も、否、たり得ないに答へるだらうと期待する。だが同時に、該組合は戦争に反対し、労働階級の利益を擁護する唯一の政黨に對して「中立」たり得るだらうか。

この問題に於て該組合は社会民主党と合致しないであらうか。該組合は政黨關係に於て何等かの「黨外的」若しくは中立的立場を占め得るであらうか。それは

勿論出来ない。この問題に於て(他の諸問題に於ても)社会民主党と協力することは政治的のみならず政黨的中立を排斥することである。

我々はクワドラート氏が労働組合は常に戦争をいふが如き問題に於てのみならず、他のあらゆる政治問題に於ても協力する必要のあることを認められんことを敢て期待するものである。然る時は即ち政黨的中立にはお訣れである。蓋し健全な思考を有する一切の人は凡ての重要問題に於て社会民主党と政治的に提携して進む組合は社会民主的組合であつて、決して「中立的」組合でないと言ふであらう。

もう一つの例。獨逸。軍國主義に對する數百萬の新支出を繞る争黨。社会民主党以外の諸政黨は悉くこの支出に賛成である。労働組合は反対である。労働組合は社会民主党との協力を隠匿しなければならぬか、それとも、全力を擧げて該黨との提携を強調しなければならぬか。組合は後者を執らなければならぬと思ふ。

然らば政黨的中立の隠れ家は何處にあるだらうか？ 或は——時、恰も獨逸の政

黨や組合の新聞で盛んに論ぜられてゐる大衆的政治組織の問題がある。無論、社會民主黨以外の諸政黨は斯やうな組織に反対である。然るに若し社會民主黨が斯やうな組織に絶對の賛意を表明するにしたら、その時は勞働組合はさうするか。獨逸の修正派が一九〇五年にケルンの組合大會が宣揚しやうに欲したやうに、又は曩に瑞西の修正派が宣揚しやうに提議したやうに、「そんな事は存じませぬ」に宣揚すべきであるか。

この場合に於てのみ組合は「政黨的中立」を保管するであらう。けれども、その代りに組合はもつと大きなものを喪失するであらう。即ち組合はこの場合に於てプロレタリアット及其の全解放運動なる事業を售るに成るであらう。

斯くて凡ての政治問題に於て政黨的中立を拒絶するに於ては政黨的中立をも拒絶するやうになる。Aに言つたものはBに言はなければならぬ。争闘の若に於て根本から諸地の政黨に異なる政策を行ふ社會民主黨が全く無いといふが如き場合に於て

のみ「政黨的中立」なるものが考へられるであらう。蓋しブルジュア諸政黨をそれ／＼に區分してゐるものは社會民主黨に對する争闘に於て是等のブルジュア諸政黨を合同したものよりも遙かに少ないのである。

最も奇妙なことは「光線」が「政黨的中立」を區別して「政黨的中立」を主張しながら、御自身はそれに氣が付かないで、眞の修正派の文句を以てものを言つてゐるに過ぎである。これは恰も獨逸の修正派が疾うの昔に言つてあるに過ぎで、その見解の不成立は獨逸のマルキストによつて疾うの昔に立證されたに過ぎではないか。

獨逸の有力な中立主義者たるフォン・エルム(修正派)は書いてゐる——「私も組合は今や既に政治がなくては濟まぬことは認めるが、この政治はその時々實際政治であり、赤裸々な利害の政治であつて、政黨的政治であつてはならぬ」。全く「光線」の欲する通りである。そしてフォン・エルムは同じくロシヤの一派が(例へば「光線」が)修正派から借用した「職業的立脚地」なる思想を擔ぎ出した。組合には政黨的政治

治は要らぬと言ふのである。即ち「労働組合は明瞭な、決定した條理を以て社會政治問題に對する見解を説述せよ、そして之をその大會に於て旗印として樹立せよ」

クワドラート氏よ、君はカール・カウツキイがフォン・エルムに何ミ答へたか知つてゐますか。

カウツキイは答へて曰く「若し君の赤裸々な利害の政治（『純労働政策』）ミ君の職業的立脚地が社會民主的ミなれば、その時はそれは中立の政策ではなくて、翼の下に頭を隠してゐる陀鳥の政策であつて、敵は君の理念的臆病を嘲笑するであらう。そして若し君の『純労働政策』が社會民主的でないミすれば、その時は君は労働者の利益の順當なる擁護を拒絶したのである、その時は君は社會民主黨に對して中立的ではなくて、之に對して敵對態度に立つたのである。』生きた現實に於て問題は右の孰れかであつて、第三のものは與へられないといふミが重要視すべきミである。

尙カウツキイは書いてゐる。

「労働組合が政治に携るやうにすれば、その組合員若しくは、少くも、政治的に成長した者即ち組合員中の優秀な者は常に——『光線』の諸君、聽き給へ！——政黨的政治を行ふであらう。若し政黨的政治に労働組合への接近を閉さんミ望むならば、労働組合及其の機關には一般に一切の政治を禁じなければならぬ。然る時は相互扶助の純會計所に變換し、純企業に變換しなければならぬ……」

「我々は斯やうな政策の結果こそ（英國トリード・ユニオンの）労働組合の中立に反對を聲明し、プロレタリアットの獨立した政治的組織（即ち『政黨的政治』が絶対に必要なことを立證するものであるミ思ふ……」

「若し政治的活動が組合的活動を支援し得るならば、その逆も亦可能な譯である——即ち労働組合は政黨を支援し得るのである、（政黨をですよ、クワドラート氏よ）而も單に運動に依るのみならず、物質的手段の獲得に依つて即ち人ミ金ミに依つて、



或は斷乎たる壓迫の手段に依つて即ち罷業に依つて、支援し得るのである……

「社會民主黨は、政治に携るに際して、社會民主的政策のみを（即ち政黨的政策のみを）すよ、クワードラート氏よ）行ひ得るのである……若し労働組合の指導が非社會民主黨の手に落ちる時は、非社會民主黨は中立的でない政策即ち反社會主義的政策を行ふであらう。」（カウツキ著「中立的労働組合」ズナーニエ社出版に依る）

「光線」の編輯者はこれを何と見るか？ 何故に諸君は「政黨的及政治的中立は同一である」を云ふ出鱈目な思想を以てカウツキが讀者の頭を打ち叩いてゐるのに對して抗議しないのであるか。

「光線」紙の「新しい言葉」は上述の如く陳腐な言葉である。「光線」の「中立的政治家」が発見したアメリカはフオン・エルムの如き極右翼の修正派によつて疾うに発見されたのである。陳腐な物だ。我がロシアの清算派は歐洲修正派の「古い帽子」を被りたがつてゐるから「歐洲社會民主黨」を自稱してゐるのである。だが自覺せる

労働者はそんな輩には段々背をそむけて行く。

編逸の社會民主黨は（その中にはカウツキもある）今「光線」によつて擁護されつゝある政黨的中立主義の「出鱈目」を立派に解明した。この謬れる「理論」のもつこ明瞭な總勘定は實際の生活がやつてゐる。階級争闘の經驗が之をやつてゐる。我々ロシア人は「歐洲からそこにある力強い正統マルクスのものを藉りて來なければならぬ。それ故に我々は二倍の精力を以て「政黨的中立」の誤れる質ひの理論を排斥しなければならぬ。

## 五、中立主義とインターナショナル

カール・マルクスが理念的に指導してゐた舊インターナショナルに於て（最初の「マルクスミ中立主義」参照）労働組合の中立主義なる思想が社會民主的労働運動の第一歩に於て既に斷乎たる攻撃に遭遇したことは前に述べた所である。

マルクスは舊インターナショナルに提出した決議文に於て労働組合が餘りに遠く政治から懸け離れてゐることを非難した。新インターナショナルが再生した時、彼は間もなく政黨に組合の相互關係をいふ重大な問題に深く立ち入らなければならなかつた。彼は最初は一一般の外廓に於て手探りでおづくことをやつてゐた。新舊兩インターナショナルの間には各國に於ける労働運動の特別な發展と成長の時代が横はつた。國情なるものが多大の役割を演じた所の發展の時代が横はつた。舊インターナショナルが崩壊したのは各國に於て國家社會主義運動が力強く成長し、諸國の労働者の全運動を一つの中心から指導せんことを期待してゐた舊組織が古つてなくなつたからである。初めの内、新インターナショナルは全世界の労働運動に共通な傾向が明かに認められる時機を待つ爲に特別な慎重を發揮しなければならなかつた。

新インターナショナルが労働組合に關する問題に初めて觸れたのは一八九六年の

倫敦會議であつた。その決議に於て該會議は言ふ——「労働者の經濟的及組合的運動は資本の威力を破砕し現在の社會に於ける労働者の状態を改善する爲に必要である……だが組合的運動は労働階級から政治的行動を要求する。……孤立した小さな組織に力を費すは非難すべきことである。經濟的運動に於て労働者の政治的所信は孤立化の根柢となるものであるが、全プロレタリア階級運動の本質から流れ出る全労働者の義務はその成長を確信ある社會黨になすものである。」

もつこ前に、一八九三年のツーリッヒ大會に於て新インターナショナルは同一生産の労働組合の國際會議を組織し社會主義的労働組合の常設國際組合を創設すべきことを決定してゐる。

右の大會に於ては米國及濠洲の「中立的」労働運動に關する特殊の決議を採擇してゐる。その決議に曰く

「是等の諸大國に於ける資本主義の發達は労働者の純經濟的組織が永い間には全く

無力になるやうな段階に到達してゐることを認め、本大會は米國及濠洲の労働組織が成るべく迅速に歐洲の相當な組織と直接の關係を結ばんことを願望す……カンゾツスは特に、遂に是等の組織を售り、打敗らんとする凡てのブルジュア政黨を排斥して、一の大なる社會主義的労働黨に結合せんことを強調してゐる」云々。

労働組合の國際的組織の創設は尠大な役割を演じた。本當に、興へられたる國の労働組合はこの労働組合のインターナショナルに合體した時から、『中立主義』を拒絶しなかつたのである。ミ全ブルジュアジャは即ち爾く見てゐたのである。そして彼等は正しかつた。諸君が實際に社會黨と合體した以上、我々は諸君の『中立的』言論に何をか求めやう、ミ獨逸のブルジュアジャは獨逸の『中立主義者』に言つたものである。此點には多大の眞理のあつたことを認めない譯には行かぬ。

そして最も正統な中立派はそれ故にこそ労働組合のインターナショナルに合體することを拒絶したのである。即ち極右翼の中立派も(米國人「極」左翼「?」)の中立派

も(佛國のサンチカリスト)も斯く行動したのである。米國の『中立的』組合が労働組合の國際組織に近い参加を採るやうな傾向を發露し始めたのはつい最近のことである。所が佛國のサンチカリストは未だに他國の労働組合に手を伸べることを欲せず、に國際組合運動から懸け離れてゐるのである。

だがその時から十年は過ぎた。各國の政治的及組合的運動は巨人の如く前進した。階級的矛盾は更に充進した。中立的幻想の餘地は更に少くなつた。そして一九〇七年のシュツトガルト大會に於て新インターナショナルは確信ある手を以て國際労働運動の豊富な經驗に總勘定を行つた。そして斷乎として中立主義を排斥し、労働組合と社會民主黨の最も密接な聯繫を主張してゐる。

一九一〇年のコペンハーゲンに於ける大會でも、社會主義の日和見主義者の著しい影響にも拘らず、インターナショナルは等しくコーペラチヴ運動に於ける中立主義を排斥してゐる。生活は現在の組合乃至コーペラチヴ運動に於ける中立主義が可

能であるといふ修正派的幻影を歩一步に粉齏してゐる。社會民主主義に賛成か乃至は反對かといふ問題は現實の生活によつて毎日のやうに組合の前に提出されてゐる。

之に對する回答を回避することは出来ない。我々は政黨政治には賛成ではないが「勞働」政策には賛成であるといふやうに言葉を粉飾することは不可能であると共に笑止である。政争は不斷に沸騰してゐる。組合がそれから懸け離れてゐることは考へられぬ。最後の中立的幻影は凋落した。

シュツツトガルト大會の約十年前にはインターナショナルが斯くの如く斷乎として中立主義に反對を表明し得なかつたことには何等の疑ひもない。この獨逸に中立主義が多くの方を有してゐたうちは、誤魔化しだらけの日和見主義的幻想が先進勞働運動の諸大國に影を没しなかつたうちは、斯やうな決議は考へられなかつた。インターナショナルがシュツツトガルトに於て爾く峻烈に爾く協力して中立主義を

排斥することが出來たのは勞働運動の主要國に於てマルキシズムが生活に同盟して既に中立主義を破砕してゐたればこそである。

個々の日和見主義者は右の大會に於てシュツツトガルトの決議を論難したものである。例へば佛國のジョーレス派の如きはそれである。だが獨逸やその他の國の錚々たる中立派は厭でも應でもシュツツトガルト決議に和睦して、單に之に對する第二段の修正で我慢しなければならなかつた。

コペンハーゲン大會の主要委員會(一九一〇年)に於て勞働組合に關するシュツツトガルト決議を確認すべしとの問題が起つた時に(チエツクの單獨主義者に關する決議に關聯して)これに對して反駁したのは佛國のジョーレス派のみであつた。そしてこれを支援したのはロシアの社會革命黨のみであつた。

兩者の代表者はコペンハーゲン決議の相當な箇所に對する投票に於て棄權した。だがこれは中立派の無力を示したに過ぎなかつた。中立主義に反對するインターナ

シヨナルのシュツツトガルト決議は労働運動の確實な收得となつた。宣告は戻るべくもなく發せられた。死人は蘇るべくもない。

シュツツトガルト決議は未だ記憶に新らしい。我がロシヤでは議會の演壇からも前次官のクルロフ氏が第三議會でその全文を朗讀してこれを流行させた。

我々はその最も重要な拔萃文けに局限しやう。大會は政黨は政治運動にのみ携り、組合は經濟運動のみに携らなければならぬ云ふが如き意見に反對したのである。シュツツトガルト定則は宣言してゐる——

『社會主義的政黨組織の課題は主としてプロレタリアットの政治運動の領域に在り、組合組織の課題は主として労働階級の經濟運動の領域に在る』

右の數語に於て組合運動のマルクスの理解の全哲學が與へられてゐる。組合は主として經濟運動に従事する。だがこれは唯一の課題ではない。組合は凡ての社會政治運動に参加する。その最終目的は社會主義である。組合は政黨と提携して社會主

義の爲に争闘する……

『この、二箇の組織の各々には——大會は續けて言ふ——その本質に相當する領域がある。その領域に於て各々は全く獨立に行動しなければならない。』

(註) 或る中立派はこの箇所を自分達の見解に對する讓歩であるを解釋した。

これは絶対に間違つてゐる。經濟争議の指導に於ける獨立は中立主義と何等の共通點を有つてゐない。斯やうな獨立は中立主義の敵が悉く承認する所である。

だがこれと並んで益々擴大するプロレタリア階級争闘の領域が存在する。此處で成功を收めるには政黨組織と組合組織の協力と一致の行動に俟たなければならぬ。

『それ故にプロレタリア運動は労働組合と政黨組織の聯繫が密接であればある程實績と好結果とを齎らすであらう。これに際して組合組織の統一を看過してはならぬ。』

『大會は労働階級が各國に於て政黨と労働組合との間に密接な聯繫が創定され且

これが鞏固になるやう努力せざるべからざることを聲明す……。『政黨と労働組合』はその行動に於て相互に扶助し、精神上に相互に支援しなければならぬ……。

『労働組合はその行動が社會主義的精神を以て貫かれる時に始めて労働者解放運動に於けるその義務を果し得るであらう。政黨には労働者の社會状態を引揚げてこれを改善せんとする努力に於て労働組合を扶助する義務がある』云々。

労働インターナショナルの意見は右の如くである。

カウツキイが大會後にライプツヒの労働者に對する報告に於てシュツツトガルト決議は原則的中主義に終焉を齎らしたと聲明したのは全く妥當である。然り、然らざればこの決議の解釋は不可能である。凡ての政黨は無差別に右の如く理解したのである。

労働階級運動の數十年の後、諸國に於ける労働組合の尨大な發達の後、労働運動

の内部に於ける諸方針の永い論議の後、インターナショナルは斷乎として労働組合の中立主義を排斥したのである。今や中立主義はインターナショナルに於て右黨及『左黨』の極端な修正派の圈内に少數の味方を有するに過ぎない。生活は自ら中立主義を問責したのである。

今やどれだけシュツツトガルト決議は個々の國に取つて適合してゐるか、これだけシュツツトガルトの指示は恰も『別箇の形状』を持つてゐるかの如く言はれてゐる我がロシアに取つて貴重なるものであるかを論じ得るのみである。

我々は以下の諸篇に於てロシアの組合運動に移らう。

## 六、我々の題目

總動定をせやう。マルクスの組織と労働組合との相互關係に關する問題に於て我々の擁護するロシア・マルキストの陣營をもつて整然と審議する爲に、要點を摘ん

で我々の見地を傳へてゐる數箇の題目を摘記するこゝにする。

だがそれより先に我々は解説の完全を期する爲に歴史的意義を有する二箇の重要な記録を質ねなければならぬ。その二箇の記録は清算派が後退を爲した——その從來の見解を比較して非常に顯著な後退を爲した——こゝを確實に設定してゐる。

然るにマルキストは今日でもマルクス派の全體によつてその分裂前に完全な一致を以て協賛された陣營を防禦してゐるのである。

一九〇五年の中頃の少數派大會に於て審議された諸問題の中に労働組合に關する問題があつた。少數派は該問題に就て浩翰な決議文を持ち出した。その決議文中に就中推奨して曰く

(三項)「マルクスの組織と労働組合との不<sup>ニ</sup>断<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>聯<sup>ニ</sup>繫<sup>ニ</sup>を支援する事及これを政黨組織の處分に在る力ミマルクスの手段を以て不斷に扶助する事。」  
そして次の事を必要と認めてゐる——

(五項)「綱領を認むる組合の總マルクスの組織に於ける代議權。」

この決議を作製した委員會にはゲー・ウエー・ブレハーノフミデー・コリツオフミエフ・ダンが參與した。

上記の決議を可決した本會議にはベー・ベー・アクセルロツド、マルトフ、スタロウエール、マルツイノフなども列席した。ゲー・ウエー・ブレハーノフの外は現在の清算派の全參謀本部が加はつたのである。即ち斯やうな顔觸で、讀者の見る如く、斷乎として中立主義に敵對する決議が採擇されたのである。

組合は「綱領」を認めなければならぬと言ひ、眞つ向からマルクスの組織に於ける組合の代議權を要求する以上、彼等が組合の中立を排斥してゐるこゝは明白である。斯やうな問題の置き方は或る點に於て一九〇七年の倫敦大會及シユツツトガルト大會の置き方よりも決然たるものである。

こんな工合であつた。

然らば、その時から現在の清算派は天祐を以て如何なる轉換を敢行したか。右の決議をしてから一年半も経つか経たぬ内に彼等は極印つきの中立派になつて仕舞つたのである。そして今以て彼等は中立派である。一般に労働運動の諸問題に於て彼等の日和見主義が強まれば強まる程彼等の中立主義もそれだけ強まつたのである。生活は中立主義の面上を打つてゐるのだが、それを清算派はそれだけ生活に取つて悪いことださ答へたのである。彼等には今や組合運動に對する見解の決定した整然たる體系などは些しも残つてゐないのである。そして彼等は孰れかの形式に於て中立主義を擁護し続けるのである。

今度は他の方面の見解へ——反清算派たるマルクス派の見解を鮮かに決定してゐる他の記録へ移らう。

一九〇七年の終りから一九〇八年の初めに掛けてマルクス派は労働組合に關する問題を盛んに討議した。組合運動の實際家を含んだ幾多の會議がペテルブルグにモ

スクワに開催された。

ペテルブルグでは地方の労働組合で働いてゐたマルキスト等を豫備會議に牽き入れた。是等の運動家(黨派の別なく)を精密に審議した上で、指南車となるべき決議が採擇されたが、その決議中の中心點に曰く、

「組合運動に於ける社會民主黨の仕事は倫敦決議及シュツットガルト決議の精神を以て行はざるべからず、即ち如何なる場合も雖、労働組合の中立性若しくは無所屬性の原則的承認の精神を以てすべからず。反對に、組合は社會民主黨の出来るだけ密接なる接近へに向つて不撓の努力の精神を以てすべきである。」

「労働組合を社會民主的に認むることは労働組合の内部に於ける社會民主黨の活動の結果たらざるべからず、而してプロレタリアットの經濟運動の一致を破るべからず。」

斯くの如く中立主義は粉齏された。エル・マルトフのみは國外の新聞でこの決議



を攻撃しやうと決心し、これを「組織的に官僚的なる處方箋」を聲明し、右の決議は組合の分裂を齎すだらうと豫言し、左の如き定則を持ち出して當時の物議を醸した。「組合運動や組合組織の問題は決して（！）政黨組織の利害ごいふ視角の下に解決すべきものでない。」

マルトフは激烈な攻撃に會つた。無黨派のエヌ・リヤザノフさへもマルトフの組合に對する或る忠告に就てこんな工合に書いた――

「政黨からの斯やうな忠告は組合の耳朵にズバトフ主義（譯者註、一九〇三年にロシアに大罷業があつた。その後、政府は労働者に對する壓迫の方針を換へ、經濟上に労働者の組織を認容するやうな態度を見せ、その代りに政治の圈内には労働者を一步も入れなかつた。警察官は労働者の親友として労働者の講演會に參與した。そして労働者の相談に乗る傍ら、労働者の様子を研究した。その種の警察官として最も有名なのがズバトフである）の顛律として響くであらう。」その時から清算派は他

の如何なる決議をも興へなかつた。されば先の決議は引續いて拘束力を持つてゐたのである。

我々マルキストは今でも全く且絶対にこの満場一致を以て採擇された決議の上に立つものであることを聲明する。

我々は他の如何なる決議をも要求しないのである。一九一三年の夏、既にこの決議は確認されたのである。我々は一人のマルキストもこの決議から退却してはならぬごいふことを要求するものである。

何れにせよ、状態は今や充分に明瞭である。何人が、如何なる政黨が、如何なるグループがロシアに於て労働組合の中立に賛成してゐるだらうか。中立を宣傳するものは（一）政府の代表者、（二）「ロシア人民同盟派」の極右黨、（三）十月黨（四）立憲民主黨（五）ブルジュア無所屬派、（六）清算派、（七）ナロードニキ諸派である。

中立主義の擁護者が雜然としてゐたこと丈けでも我々に眞面目な考察を促すも

のである。無論地主やブルジュアの貪慾な偽臨の中立主義を清算派やナロードニキの誤謬を混同してはならぬ。だが、事實は目前にある。ロシヤに於て中立主義に對して——それが正統中立主義にしろ——闘つてゐるのはマルキストのみである。中立主義は種々の動機から労働者に種々の政派を強めてゐる。

我々マルキストは言ふ、我々は一九〇七年及一九〇八年の舊決議の基礎に立脚するものである。

#### 我々の題目

- 一、労働組合へは宗教上及政治上の見解に差別なく凡ての労働者及婦人労働者を招待すべし。
- 二、労働組合は單一たらざるべからず、即ち如何なる黨派も競争する組合を形造るべからず。
- 三、組合に於ける少数は絶対に多数に服従せざるべからず。組合の内部に於ける方針の争闘は避くべからざるものなり。

る方針の争闘は避くべからざるものなり。

四、組合は労働者の經濟運動の機關として残らざるべからず。又政治運動に参加すること拒絶すべからず。

五、凡ての労働者マルキストはそれに相當する労働組合の成員たらざるべからず。

六、マルキストは組合内にマルクスの全體の管理の下に行動する根元を形造り、組合の内部に於て組織されたる全體として出動せざるべからず。

七、マルキストは倫敦會議及シユツトガルト會議の決議並に一九〇八年の諸決議を以て自己を指導し、労働組合マルクスの全體との密接な關係を設定することに努め、中立主義に對してその全運動及宣傳を行ふ。

八、相互代議制はこの密接な關係の望ましき一形式を認む。

九、前記の密接な關係の設定は飽くまでも組合の内部に於ける仕事により勞

働組合の毎日の創造的仕事に於ける不斷の参加又生活の事實に於て如上の密接なる關係より全労働運動の爲に生ずる巨大なる利益の證明によりてのみこれを獲得すべし。

## 第二章 ロシヤに於ける組合運動

### 一、最初の歩武

大衆現象としてロシヤ労働者の經濟的争闘が起つたのは九十年代の大きな經濟的結束からで、少くも二十年の歴史を有する。併し西歐に於て労働組合を稱せられるものに多少でも似た労働組合が存在したのは僅かに七八年來のこゝである。これは我がロシヤ労働運動の矛盾の一である。この生活の矛盾は今日までもロシヤに存在してゐる。近年の昂騰を例に取るも、經濟的結束は、一の地方から他の地方に飛び移り、益々新しい労働者の階層を捉へて、抑へやうもなく成長して行く。然らば労働組合はどうであるか？ その成長は、少しの程度に於ても、一般には經濟的争闘の成長に、部分としては經濟的結束の成長に相應してゐるだらうか？ 我が公

然の労働組合は、組合として西欧の到る處で原則となつてゐるやうに労働者の経済的争闘を指導してゐるだらうか——勿論否と答へなければならぬ。労働組合は、組合として、我が國では未だ實際に労働者の経済的争闘を指導するこいふその主要な日常の任務を果す可能を奪はれてゐるのである。これによつて何故に我が組合運動が今日我々の眼に映する程度よりも遙かに發達し得なかつたかこいふ謎が説明される。斯やうな現象を『五年』から（一九〇五年のこい）八年も経ち、辛つこのこいで組合の『自由』を紙上で認めた三月四日の規定から七年も経つた今日も目撃しなければならぬとすれば、一切の経済的結束が法律によつて刑事上の犯罪として罰せられて來た一九〇五年までは如何なる状態に在つたか明白である。経済的争闘はあつたが、労働組合はなかつた——當時の情况は斯やうに定義づけるこい出来る。

だが経済的争闘があつて、組合がなかつたら、何人がこの争闘を指導してゐるか。多くの場合、社会民主主義團體が指導してゐたのである——少くも此の團體が此

の世に出現した時からさうである。ロシアでは分業は労働運動の最初の踏出しに際して不可能であつた。數年に亘つて、経済的運動及び経済的活動は社会民主主義團體の間で主要な、殆ど絶對的活動であつた。だが後になつて、政治的運動が一般に認められた課題となつた時も経済的争闘の指導は概して社会民主主義的中心の活動の一として残つてゐたのである。運動の組織力は未だ労働組合と政治的組織との間の意識的乃至計畫的分業が可能になる程には成長しなかつた。

そして上記の運動の第一階梯はロシア・マルキシストの當時の見解に、その組合運動に關する最初の決議に不滅の印章を刻したのである。一九〇三年に於けるロシア・マルキシストの第二回大會の決議は右の如くであつた。當時に於けるマルキシズムのロシア正統派の見解は右の如くであつた。

労働組合の中立主義に關する問題は、組合と政黨との間の相互關係に關する問題は、生きた問題として、成熟せる生活の問題として、少くも、根原のロシアには

如何なる労働組合もまだ殆ど無かつたといふ單純な理由に因つてロシア・マルキストの前に立つことが出来なかつた。政黨と労働組合との間の分業は政黨は「政治」のみに携はり、組合は「經濟」のみに携はらなければならぬと言ふことではない。政治と經濟との聯繫は切つても切れないものである。シュツトガルト國際社會黨大會が、組合は單に主として（絶対にではない）經濟的争闘に携はることを指示したのは洵に正しいことであつたのである。だが、それにも拘らず、政黨と組合との分業は必要である。國際的運動の全經驗は毎日のやうにこれを確證してゐる。

斯やうな分業は我がロシアに於ても一九〇五——一九〇六年から始まつた。そして此の過程が既に充分に遠く進んだ時に、組合運動が著しい大きさに達した時に始めてロシア労働運動者の中には組合の「中立」に關する問題及一般に組合の政黨に對する關係が實際的な、眞面目な問題となつて來たのである。

ロシア組合運動はロシア社會民主黨によつて育くまれた。マルキストは最も多く

我が労働組合の創設に努力した。自由主義者の側からも労働組合運動に参加せんとする多少の試みがあつた。將來の「國家社會主義者」たるナロードニキも労働組合に参加しやうとした。だが是等は大した痕跡を留めはしなかつた。我が労働組合運動の搖籃を見成つたのはマルキストである。マルキシズムは之に不滅の印章を刻した。「人合國」<sup>（インターナショナル）</sup>と名づけられるものはロシアには最初からあつた。即ち組合運動の活動家は同時に社會民主黨の活動家であつた。一人の人間に社會民主黨員と組合運動家が合體してゐた。だがこれだけでは組合と政黨の健全な發達を保障し得るものではない。發達の或る階梯に於ては、或る事情に際して組合運動家の一部に、政黨から離隔し、「一帝國」<sup>（一帝國）</sup>として出動し、時には政黨との競争にさへ入らうとする希求が現れるのである。

社會民主黨が労働者の經濟的争闘に根氣よく参加し、經濟が政治と密接に聯繫すべきことは自明の理であることが判つて來た。だがそれと同時に、來るべき労働組

合し政治的組織との間には如何なる組織的關係が創られるかは未だ全く臆氣な線で描かれてゐたのである。その頃、ロシアの或る正統マルキスト達が中立主義に對してすら隱忍の態度を執つてゐたのは右の事情に因るものである。此の問題に於て彼等の見解が不明瞭なのは當時の運動の解體を反撥したのみである。

だが運動は次第に生長するに共に複雑になつて行つた。經濟爭議の實際的な、日々の指導は特別の經濟的組織たる労働組合に頼らなければならなくなつた。だがそれは社會民主黨が單に議會選舉の政黨となり、全く經濟から遠退かなければならなかつたといふことではない。社會民主黨に對する如上の見解はマルキシズムに何等の共通性を有つてゐない。社會民主黨は労働者の日々の經濟的争闘に興味を持たざるを得ないのである。その政治運動に於て最も大なる役割を演ずるは經濟的動機である。その全活動に於ける主要な位置は「經濟」に屬する。社會民主黨は労働運動及労働争闘の凡ての形式を抱持する。但し、或る専門の作用は専門の組織に從屬する。

専門の組織とは労働組合、消費組合、教育協會、青年會、労働俱樂部等である。だが是等の機關は悉く社會民主黨の色彩を以て彩られなければならない。是等の諸機關に社會民主黨は社會主義的精神を傳へる。是等の諸機關は運動の個別的方面を遂行するのみならず、最後の目的の爲に争闘すべく援助しなければならぬ。是等の諸機關は労働階級の爲に一樣に必要である。だが全體に於ける全労働運動の最高表現となるものは取も直さず全體に於ける社會民主黨である。

獨逸に於ても例へば、人合パーソンナル・ユニオンなるものは最初からあつた。そして社會主義者に對する特別法が倒壊して組合が最初の大成功を、顯著なる成長を獲得した時、組合運動家の一部分には「政黨からもつみ先へ」ミイフ標語の運動が始まつた。

一八九三年獨逸社會民主黨のケルン大會に於てアウエルの如き中庸な社會民主主義者は等しく社會民主黨に屬してゐた組合運動の首領間にある斯やうな傾向に對して最も峻烈に反對するのを自分の義務と數へたものである。

ケルンの大會に於てその頃既に獨逸組合の首領であつたレギンは黨の幹部の名を以て書いたアウエルの手紙を發表した、其の手紙に曰く——「以前には我が勞働組合は獨立的な一部分であるに感じてゐた、だが依然として組織された、自覺せる全勞働運動の一部分として感じてゐたのである。組合は、謂はゞ、砲兵隊が全軍隊に對してあるやうなものであつたのだ。今では組合を政黨から切り離して、政黨と組合とを互に相競争する二つの組織と看做すやうな傾向が見認められる。私は此の傾向を以て、全獨逸勞働運動の爲に有害であるに數へる」(エス・エヌ・プロコボウイチ「勞働者の組合と其の課題」ベテルブルグ、一九〇五年)同様の有害な潮流は、下記の諸論に述べる如く、或る期間を経て我がロシアにも現れた。而もマルキスト政治的組織の生存を困難にする外面の諸條件はこの潮流をして更に有害なものとした。そして日和見主義的インテリゲンツィヤが其の間に演じた役割は事態を二重に紛糾させた。だがこれは既に運動の第二階梯であつた。我が組合運動が盛んになつ

て來るにこれと定まつた日和見主義的潮流としての中立主義は既になくなつた。

勿論、さうなつても右の如き中立主義を擁護する個々の著述家はあつた。例へば、プロコボウイチ氏の如きは一九〇五年に次のやうな事を宣揚した——

「勞働者の職業組合は政黨的關係に於て中立的でなければならぬ。……組合には政黨論争は無縁である。……組合は赤裸々な利害の政策にのみ携はらなければならぬ。しかし皆はプロコボウイチの此の聲を修正派的哲學を繰返して歌ふ自由主義者の聲だに批判した。マルクス派の内部ではその右翼ですらも決定的には中立主義を擁護しなかつた。例へば一九〇五年の前半に開催された右翼マルクス派の「第一全露會議」では勞働組合に關して原則的中立主義からは極めて遠い決議が採擇されたことを示せば充分であらう。修正派的中立主義は我々を避けて行くやうに思はれた。この問題に就ては大した不一致は起るまいと期待された。所が豫期に反して、一九〇六年及一九〇七年は此の問題に於て根本の疎隔を齎した。

## 二、一九〇六年及一九〇七年

一九〇五年の終りに至つてロシアに於ける組合運動は華麗な色を以て花を開き始めた。それは未だ「眞の」労働組合ではなかつた、即ち緊乎した、嚴肅に形造られた組織ではなかつた。だが大衆は動き始めた。團結する可能を得た労働者は競つて組合的組織を目蒐けて走り集まつた。生氣は漲つてゐた。労働階級に愛想よくその扉を開いた。ペテルブルグ(及モスクワ)の諸學校に於ては各職業の労働者の集會が不斷に行はれた。此の嵐のやうな諸會合に於て労働組合の端緒が置かれたのである。労働者は擧つて組合に加盟したのである。

昨日は未だ何等の労働組合のなかつた處に今日は數千の成員を有する組合が出現したのである。組合は事變の渦中に成長して行つた。最初の内は尙鞏固な組織が有り得なかつたけれども創設された組合の基礎は健全なものであつた。その上には生

々した大膽な精神が漲つてゐた。此の會合及組合の主な辯士及組織者は社會民主黨員であつた。幹部は労働者の社會民主黨員から選出された。それ故に最初から労働組合に社會民主黨員の聯繫は獨りでに設定された。

組合運動は發達して行く。一九〇六年の初めに掛けて此の運動は更に鞏固に形造られ更によく結束した。そして終始組合の間には社會民主主義の精神が主人の位置を保つてゐた。就中、當時の労働組合の定款は極めて興味あるものである。その定款には、組合の目的に課題に言及せる項目に於て、社會民主黨員の最小限綱領を記入し、組合が社會主義の争闘的地盤に立つてゐることを強調してゐる。

これは傳統になつて、何人も議論しやうとはしなかつた。此處にこそ運動の健全なる方面があつたのだ。斯やうな大勢にあつては組合の「中立」なんてことは議論の餘地もなかつたのである。我が將來の中立派は、一般の機運に服従して、當時は此の問題を持ち上げやうとさへもしなかつた。そしてこれに踵いだ反革命の時代に感



應して我が組合運動の右翼の一有力者たるカー・ドミートリエフは一九〇五年及一九〇六年の組合の聲明及定款は「一般的且型板的」であるを聲明したのみである。

中立的「批評」は遙かに晚く現れた。そして勿論、主として、「マルクスの」サアクル及マルクスのインテリゲンツイヤもいふべきものから出て來た。

一九〇六年の初めにはさういふ批評はなかつた。あつたとしても極めて臆病なもので、我々の耳に聽えない程であつた。眞の大衆労働組合は労働黨を提携して歩いて行つた。

最も密接な聯繫が作られてゐた。我が組合運動の他の有力者、マルクス派の「たるエヌ・リヤザノフはかう書いてゐる——

「一九〇六年の初めに掛けて我々は多數派の間にも、少數派の間にも立憲民主黨及社會革命黨の標語になつてゐる所の中立の擁護者を見ない。」その時代の組合運動の直接参加者の此の證明は極めて貴重なものである。これはストツクホルムに於け

る一九〇六年春の労働組合に関する滿場一致の決議が如何にして可能になつたかを我々に説明するものである。その決議は中立的ではなかつた。それが可能になつたのは組合そのものの中に於ける労働者が中立主義を刎ね退け此の原則の擁護を立憲民主黨、ナロードニキ及労働者の間に勢力の少ない政派の専有權に委せたからである。

ストツクホルム大會が労働組合に関する決議を滿場一致を以て(棄權者一人)採擇し得たのは中立主義がロシア社會民主黨中に、その頃、幾千の眞面目な勢力をも持つてゐなかつたからである。だがストツクホルム決議が中立的でなかつたことはほんごに慥かであるか? 後になつてそれは反對なものであるを幾度も確認されたではないか。此の質問に對する公平な回答として此處に該決議の主要な箇所を列挙しやう。即ち「經濟的争闘はプロレタリアットの政治的争闘を經濟的争闘の正しき結合してふ條件に際してのみ労働大衆の状態の鞏固な改善をその眞の階級の確立に導き得るものである。(圍點は何處もロシア側の提案による)」

「労働組合は時代の雰囲気にて、労働階級の経済的利益の擁護以外、プロレタリアットを直接の政治的争闘に惹き込み、労働階級の廣汎なる組織及政治的合意に協力する。」

「此の雰囲気にて労働大衆は團結し且政治的に合同して益々社會民主黨の旗下に立つものである。」

之に鑑みて左の件を認む。

(一) 政黨は労働者の組合組織への希求を支援し凡ての方法を以て無所屬労働組合の形成に協力すべし。

(二) 組合へは全黨員が加入し、組合の全活動に積極的参加を採り、常に組合員中に階級連帯感及階級意識を鞏固にし以て争闘及運動に於て組合の聯繫を有機的に結び着くべし。

(註) ストツクホルムに於ける大會は労働組合に關する決議に次の如き追加を採擇

した。

「大會は民族に依る労働組合の組織てふ原則に對して斷乎たる反對を表明す。」十人の棄權者を除く全投票を以て採擇された此の立派な決議は労働組織を必ずや民族的徴候に依つて建てやうと欲する者即ち労働猶太人及労働波蘭人を團結させずこれを分離せんと欲する我が個別主義者の眉にではなく、眼の中へ落ちてゐるのである。」

右のやうな決議には、勿論、一人の正統中立主義者も署名しないであらう。右決議の全精神は中立的でないからである。だがこれは我々が今右決議の何れの文言にも頭から同意だと言ふ譯ではない。その後の事件は此の決議が不充分であることを立證した。だが兎も角、「争闘及運動に於て組合と黨とを結びつける。」ここを中心課題としてゐる。此の決議は正統中立的決議とは數へられない。

後になつて或る中立主義者は「無所屬労働組合の組織に協力する」の必要に關する

指示に「引つ掛からう」と試みた。

之からストツクホルムが組合の中立に賛成を表明したかの如くに結論しやうとしたのである。だが此の眞理の歪變に就てカウフキイが次のやうに書いたのは千倍も正當である——「労働組合を或る政治觀乃至宗教觀の爲に閉塞しやうと欲するやうな眞面目な中立の仇敵は殆ど一人もないであらう……中立化に際して主要な問題は労働組合が宗教及政黨の區別なく凡ての労働者の爲に開かれてゐるか否かにあるのではない。労働者が政治に携はらなければならぬか否かにある」(カウフキイ「労働組合の中立」)

「無所属組合」といふ表現は、恐らく、不確實で不成功である。恐らく、眞つ直ぐにかう言つた方が好かつたであらう！「組合は一切の労働者を採用すべし、されどその社会民主主義的組合員は組合を社会民主主義に最も密接な關係に導くやうに努めざるべからず。」だがストツクホルム大會は正統中立的見地を通過させはしなかつ

た。その決議はボルシエウイツクのでもなく、メニシエウイツクのでもなかつた。

その時はボルシエウイキもメニシエウイキも今は政黨的に形造られた組合を建てることは出来ない、だが組合の中立を宣揚しては不可ない。「争闘及運動に於て組合と政黨とを結びつける」やうに努力しなければならぬといふことに一致してゐたのである。

我が組合運動の一領袖はその状態を次のやうに定義づけてゐるが、それは全く妥當である。「兎も角も、合同大會(ストツクホルム)が召集された一九〇六年の春に掛けて社会民主黨の中には中立主義の歸依者は一人も残らなかつた。労働者の組合組織への歸趨を支援するの必要を認め、當時の條件に於ては政黨的に形造られた組合を組織するが目的に叶ふもの多數へて決議は斷乎として中立主義を拒否してゐる。」

そしてストツクホルム決議がその基礎に於て正しかつたからこそ、その決議は倫敦に於て(一九〇七年)廢棄されず、却つてその基礎に於て認定されたのである。

倫敦決議は「労働組合に於ける仕事に關する合同大會の決議を確認して……」云々  
 といふ言葉を以て始まつてゐる。

### 三、倫敦決議の前

労働組合に對する態度に關するストックホルム決議と倫敦決議との間に矛盾がないとすれば、ストックホルムに對して幾らか忍耐の態度を採つてゐる中立派は何故に爾く倫敦を消化しないのか？ 何故に彼等はストックホルムと倫敦との間に何等かの相反を設けんと努めるのか？

その譯はかうである。

一九〇六年から一九〇七年に掛けてはロシア・マルキシズムの日和見主義的インテリゲンツィヤに取つて、多くの點に於て、危機の年であつた。反革命の開始は既にその反映を置き動搖ミグラツキを惹起した。これは労働組合に關する問題にも現

れた。然るに、マルキストは此の問題に於て倫敦ではストックホルムと比較して一歩前進したのに、日和見派は此の時ストックホルムから一歩後退したのである。

その結果として中立主義の賛成者と反對者との距離は二倍も増加したのである。ストックホルム決議はもつと運動の初期に即ち意見の疎隔がそんなに激しくなかつた時に書かれたものであつて、もつと一般的な公式を被せられてゐるから曲解者の助けを藉りて之を「中立的」精神に於て、説明しやうと企てる者がある。

一九〇六年及一九〇七年に於て社會民主黨の右翼には後になつて致命的となり、この右翼を清算へ導いた所の傾向が現れた。我々は「床下」に對する蔑視の態度や「狭い」政黨から所謂「廣い労働黨」労働會議などの思想への企畫に就て言つてゐるのである。

一般に「床下」に對して否定の態度を執つてゐる者は、勿論、組合を此の「床下」の政黨に結びつけやうとしない、それは當然のこゝである。そしてマルクス派が組合

「労働黨の聯繫を論じ始めるに、公然の組合を『床下』なんぞに結びつけるのは以ての外であるに反駁されたものである。

既に倫敦會議に於て『床下』に對する清算的態度は明かに現れ始めた。一九〇八年にエル・マルトフは中立に反對せるマルキストの決議に異議を申立て、組合に政黨との密接な聯繫の必要に賛成する滿場一致の決議を反駁し、就中、公然の組合を『床下』の政黨に結びつけることの不可を指摘したのである。

つい先頃清算的刊行物の記者デー・パツールスキイは一九一三年度『メタリスト』の第四號に於て中立的立場を救つて、次の様に書いてゐる――

「労働組合は充分の程度に於てその合法的存在を尊重するにこゝが出来ぬ。そして組合になつてゐる大衆組織に取つて床下なるものが何であるかを知つてゐる。」

勿論マルキストも黨の床下的存在から如何なる困難が生ずるかには非常によく理解してゐた。けれども彼等が外部的障礙を避ける路を探してゐた時に、『床下』の原則

的反對者は外部的困難から原則的中立主義の爲に餘計な結論を作つたのである。

即ち此處から、右翼が漸次にストツクホルム決議から遠ざかり、之を中立的精神に於て『開陳』し始めるやうなこゝが生じて來たのである。そして日和見主義者の或る部分が床下に對する敵意を以て貫かれるに及んで、益々組合を『床下』黨から遠退けて自らはストツクホルムから後退するやうになつたのである。

日和見主義者中の斯やうな傾向に鑑みて、就中、マルキストは倫敦に於て中立主義に對してもつゝ範疇的な如何なる不誠意の『開陳』にも屈服しない出動を要求したのである。床下に對する否定的態度は我が日和見主義者にあつては常に公然の無所屬組織の稱揚に相結ばれてゐたのである。政黨からは無所屬組織に懇へる以外には誰にも懇へる者がなかつた。有名な『労働會議』の思想はその主要な解釋者にあつては、ロシヤの實際家にあつては、(ラリンヤモスクワに於ける彼の賛成者なき)常に『床下』に對する否定的態度に、現存政黨に對する争闘に相結ばれてゐたのである。

「廣い労働黨」なる標語は常にその裏面として恰も宗派的な「狭い」黨派として「現在政黨を屠れ」<sup>ス</sup>いふ問題を持つてゐたのである。

此の思潮がおのづから中立主義を涵養したのである。さうだ、それ以外には勿論、あり得なかつたのである。現存の「狭い」政黨を以て「廣い労働黨」の創設を裏切るものゝ慨歎する者は、勿論、組合に「狭い」政黨との聯繫の設定を獲得せんとするものではない。却つて、斯の如きは中立主義を「廣い」組合の「狭い」政黨からの獨立を宣傳せんとするものである。

反對の極端に心酔してゐる所の「労働會議」の賛成者もあつた。即ちエヌ・イー・シモフは、コーベラチヴ、組合、政黨なきの合流に依つて「廣い」政黨を形成するといふ「ラリン」計畫を主張してかう書いてゐる――

「地方及中央の黨機關に於ける地方及中央の労働組合の正當な代議制及其の逆の正當な代議制を速かに設定しなければならぬ、――斯の如き方法は兩階級組織の絶え

ざる接近を促し、將來に於てこれを一の労働黨に合流せしむべき地盤を作るであらう」

(エヌ・イー・シモフ、ベテルブルグ「労働組合と社會民主黨」)

相互代議制は立派な物である。塊地利人の如きは卓越せる結果を以て之を實行してゐる。だが組合に黨の「一の労働黨への合流」を獲得することは「組織的一元論」に關する半サンチカリズム的計畫に接壤する反對の極端に投ずることである。マルクス派はそんなものを獲得しやうとしてはゐない。社會民主黨(單なる「労働黨ではない)及労働組合は自立的に存在しなければならない、だが兩者の間には最も密接な聯繫がなければならぬ。

日和見主義者の半サンチカリズム的傾向は驚くに足りない。マルキシズムの地盤に緊乎<sup>シツカク</sup>立つてゐない人々には斯くあつたことであり、斯くあるべきことである。

エヌ・イー・シモフは規則を確定した例外である。彼は成るべく早く社會民主黨を

組合中に溶解させやうと欲したのである。彼の地の同志も同様のこころを欲したのである。謂はゞ彼は「狭い」黨を「廣い」無所屬組織の抱擁裡に窒息させやうと期待したのである。彼の他の同志等も凡ての期待を無所屬組織に懸けてゐたが、そこからは等の組織の爲に「床下」から離れ中立を實現するの必要を導き出したのである。

「廣い労働黨」一味の陣營に於ける分散は避け難かつた。だがこの「潮流」は全體として既に「狭い」黨に對する攻撃のみ以てするも中立主義を涵養するものであつた。中立的運動は此處にも彼處にも現れた。實際に於てよくある如く、その熱心は度を外れて、中立派は諸處で組合を政黨に對して對抗させるやうになつた。政黨はその言ふべきこころを言ひ、その警告を以て出動しなければならなかつた。かういふ事によつて以て倫敦決議を留意したのである。

#### 四、倫敦決議

前掲の諸論文に於て我々は倫敦決議が如何にして用意されたかを示した。我々は労働運動に於て或る一派が純修正派的解釋に於ける原則的中立主義を宣傳し始めたこころを看取した。

漸くを開始された將來の清算派の争闘は事態を紛糾させた。「舊」マルクスのなにもに對する争闘を組合の中へ移し入れ始めた。マルクス派によつて育まれ、水飼はれた組合はマルクス派に對抗し始め、中立主義の「學說」を利用し始めたのである。斯やうな條件に際會してマルキストたるものは黙つてゐられなかつた。ストツクホルム決議は不充分になつて來た。新しく、明確に現れた極めて有害な傾向に反對して出動しなければならなくなつた。それは二つの形式で爲すこころを得た。此の傾向を手厳しく非難する政治的決議の形式に於て議論戦は抜きにして積極的な形式で労働黨の見地を明示した決議の形式に於てである。倫敦では（一九〇七年春）第二の道が選ばれた。

先づ倫敦決議の本文を讀者の記憶に蘇らせやう。

我々は、一般に、政黨及勞働組合の相互關係に關する問題に就て基本書類を引用するやうに努める。加ふるに倫敦決議は、その當時、全くブルジュア新聞に再録されたが、今では何處かで忘れられてゐるかも知れないから。

其の内容はかうである——

「勞働組合に於ける仕事に關するストックホルム大會の決議を確認し、社會民主的仕事の根本問題の一を——即ち勞働組合がマルキシストの理念的指導を承認するここを助成し、又組合組織的聯繫を設定する事、地方的條件が許す所には此の問題を實現するの必要をマルキシストに想起せしむべし。」

此の決議は自覺ある勞働者の廣汎なる範圍から最も完全な代表を網羅した中でロシヤ・マルキシストの大多數を以て採擇された。

然るに少數は此の決議に對して生死の戰爭を宣言した。少數には當時の勞働組合

の活動家の或る部分も合併した。

倫敦決議の反對者の主なる結論は左の如くである。この決議は恰もロシヤに於ける組合運動の従來の政策の決裂を意味する。此の決議に従へば、今や現在の組合を廢棄してその代りに純政黨的勞働組合を作るか或は現存組合に「貼り紙」をするかの外には道がない。何れも組合運動の分裂へ導くものである。

必ずや社會民主黨やナロードニキや無政府主義者や無所屬派等の孤立せる並行組合が出来上るであらう。

勞働者の經濟的争闘は抑止されて仕舞ふだらう。前進への代りに大きな後退が現れるであらう。

我が中立派は斯やうに考察したのである。そして倫敦決議は彼等にとつてマルキシストに對する強力な狩り立ての爲の新しい手綱となつたのであるが、彼等に依ればマルキシストは恰も組合を「後見」しやうと望み、組合に何等の獨立性をも與ふるを望



まず、これを機械的過重に變換せんご望み、これに<sup>る</sup>を置き、労働運動を粉塵せんご望むものださうである。

中立派の斯やうな「結論」の中には何か妥當なものがあるだらうか。

第一に、事實の問題である。ほんごにマルキストは組合に於ける仕事の從來の線を酷變しやうご決したか。

いや、倫敦決議は實際に於て少しもそんなごを意味してはるなかつた。

波蘭ご西北地方には本當に純政黨的組合が存在してゐる。そこでは社會民主的組合に加入してゐるのは社會民主黨員ごこれに共鳴する波蘭社會黨組合に加入してゐるのは波蘭社會黨のみである。

ブンド組合にはブンド派ごこれに共感する者ばかりが加入してゐる。波蘭には、右の外に、ブルジュア的及「基督教的」組合が存在してゐるがこれにはまだブルジュア及反動派の勢力下にある労働者が加入してゐる。波蘭では、組合運動は眞個に粉

塵されてゐる。

我々は此處に如何なる條件が波蘭や西北地方に於てかやうな状態を創つたかを詮索する暇はないが、波蘭に於ては、一方から、猛烈な階級争闘があり、他方から、民族問題が主要な役割を演じてゐるから右のやうな状態が創られたのである。兎も角、如何なる「中立」を以てするも波蘭に於ては數千及數萬の労働者の民族主義ご尊僧主義の反動勢力に服従してゐるごいふ事實を芟除するごが出来ないのである。如何なる「中立主義」も此處では波蘭マルキスト派ご波蘭氏族社會主義者の間の分裂を芟除するごが出来ないのであらう。此處では、分裂は労働者の奥底にまで浸潤したのである。そしてこれは歴史上に然らざるを得なかつたのである。事態の實質に依つて此處では歴史上に重大な二箇の世界觀即ち社會主義ごブルジュア急進的民族主義ごの争論が行はれて來たのである。

だが斯やうな條件はロシヤの労働運動には過去にもなかつたし現在にもない。そ

ここで、倫敦決議をそれが恰もロシアの組合運動に「波蘭の道」を懲悪したかの如くに解釋するのは眞理を曲解することである。現在のロシア領波蘭に於て入用であり、重要であり、不可避であることはロシアの労働運動には恐らく不用である。ロシアのマルキストを波蘭のマルキストと結合してゐる重要な組合運動に於ける仕事はマルクス的内容といふ事である。だがこれは此處にも彼處にも凡てに於て同様の組合形態がなければならぬといふことではない。

倫敦決議を作製したマルクス派の機關紙に掲載され、以て該決議の公式な解釋となつた論文に於てその筆者は一九〇八年に次の如く書いてゐる――

「ロシア・マルクス派の立場はこの問題に於て波蘭及猶太(ブンド)マルクス派の立場と全く合致するやうに描き出されたが……實際は遙かにさうでなかつた……決議はマルキストでない労働者の加入してゐる廣い労働組合から拒絶せよとは決して懲悪してはゐない。」

決議は現存組合の代りに直ちにブンドや波蘭の組合に倣つて純政黨的組合を組織せよとは決して懲悪してゐない。ブンド派や波蘭社會民主黨員が大會の委員會に於て決議への合併を讓歩した見ただのは無理からぬことである。」

單に文書の上の聲明では、若しもマルキストの實際の仕事がこれに相當しなければ、勿論、不充分である。だが彼等の仕事は事實に於て上に概論した精神に於て進んでゐるのである。何處でも該決議の賛成者は一人として組合に「貼り紙」をしなかつた、即ち偶然の大多數を利用して組合を「政黨」の組合であるとは宣明しなかつた。何處でも此の決議の賛成者は一人として組合の中へ分裂を持ち込むやうな事はしなかつた。現存組合の代りに「政黨の」組合を創れとは提議しなかつた。何處でもマルキストでない労働者が組合に入ることを差止めはしなかつた。却て、政黨や宗敎觀の差別なく凡ての労働者を熱心に組合へ召請したのである。何處でもこの決議の賛成者は一人として、新しい組合を創る際に、これを純政黨的組合の型タイプに依つて

これを組立てはしなかつた。又誰に對しても門戸を開きしはしなかつた。

我々は幾度も新聞で反對の事實を擧げるやう我々の反對者に提議した。

「中立派」が我々の味方に歸してゐるやうに我々の味方が行動したやうな場合をロシア労働運動から擧げて見るがよい。我々は何人も擧げ得まいと確言する。何故なれば、そんな場合はなかつたからである。マルタスの決議は組合運動に分裂の陰影をも惹起しなかつた。

該決議は労働運動を分裂させる所か、これを鞏固にすると同時にその目的を貫徹したのである。即ちプロレタリア事業の働き手に正しい道を指示し組合をマルキシズムに整しかけ、組合から特殊の敵國を創つた日和見主義的中立派に反撃を喰はしたのである。

運動に正しい河床を示したのである。そして倫敦決議の正しさを最もよく立證するものはシュツツトガルトに於て全労働インターナショナルが同様の精神に於て表

明したこゝである。

シュツツトガルト國際大會は同じく一九〇七年に(數箇月後に)行はれた。

マルタスの決議の反對者はそれまで我々を何か猪毛の畸形兒でもあるかの如くに描き出さうと試みたのである。彼等是我々の見地は全世界の労働運動に於て何等の支柱を有せず、倫敦決議は何か無類なものであると確言したのである。此の議論は事實によつて立派に解決された。シュツツトガルト大會は手厳しく且斷乎として此の中立主義を排斥し、社會民主黨と労働組合との密接な聯繫の必要を強調したのである。即ち倫敦決議は國際労働運動の経験を正しく算定し、その経験からロシアの爲に實際的決議を作つたこゝが判つたのである。その時、中立主義のロシアの理論家には、次の論文に見る如く、シュツツトガルト決議は我々に關して書かれたのではなく、もつと労働の舊い國々に關して書かれたものであると證明する一事が残つたのである。だがロシアの中立主義へは、一般の中立主義への如く、シュツツト

ガルト決議によつて致命傷が與へられたのである。

倫敦決議はロシヤ労働運動の分裂を激したのではなくて、ロシヤ労働運動の二つの主要な形態の最も密接な合同に接近を激したのである。

目に立つて来たのは組織的細目ではなくて、方向であり、傾向であつた。我々の若い労働運動は如何なる道を辿らうとするか、中立的孤立の道をか、或は社会民主党との最も密接な接近の道をか？

マルキストは該運動が舊い道を進むやう、全力を盡ぐべしと言つたのである。此處にマルクスの決議の眞意がある。

組合運動の一致いふ精神に於てこの決議の賛成者は是まで働いてゐるのである。マルクスの決議は言つた——我々は組合へ、政見の差別なく、凡ての労働者を召請する、そして出来るだけ廣汎な構成の組合を組織する。だが該決議はマルキストに言つた——諸君は組合に於て中立主義を祝福しないやうにしなければなら

ぬ、組合の内部に於ける不斷の創造的仕事を以て凡ての労働者にその組合が労働黨と密接に相聯繫しなければならぬことを證明しなければならぬ。

だが孰れかの労働者が社会民主党に對して「中立的」であるにしても、それは俺も「中立的」にならうといふことを意味するものではない。俺は彼等に言ふ——「君達はまだ「中立的」だ、まだ生活は君達の政黨は労働黨であることを君達に教へ切らないのだ、階級争闘は君達にそれを教へるだらう、だが當分は一緒に働かうぢやないか！……カウツキイが言つてゐるやうに、「組合と政黨とは同一である」は我々の中でも言ひ得るやうな方向に拍節リズムを守つて整然と段々に働かなくてはならぬ。」

これを——これだけを——倫敦會議は言つたのである。「貼り紙」をすることは社会民主党から自覺のない者を嚇し退ける爲に「中立派」によつて案出された狡猾な目論見である。

## 五、我が中立派の災厄

我々はロシア労働運動の条件の中にさうして倫敦決議に對するロシア・マルキストの前提が成熟したかを示した。

組合運動に於ける我々の仕事の方向は中立に反對し、永い間の仕事を以て労働組合の二つの主要な形態の間に最も密接な聯繫を設定することに於てはならぬ。

倫敦決議はマルクスの全體の漸く擡頭した「原則的」無原則的「云つても好い」中立主義に對する單なる自衛の行爲に過ぎない。該決議は、それと共に、國際労働運動の全實驗の歸結であつたのである。

ロシア中立派が倫敦決議に對して如何なる態度を執つたかは周知のこゝである。彼等は公然とこれに對して反旗を翻したのである。

シュツットガルト國際社會黨大會が倫敦大會と同じ精神に於て意見を表明した時

から半年を経過したばかりでロシア中立派は既に公然と舊陣營を擁護するこゝが出来、來ずに退却を始めるの餘儀なきに至つたのである。そこに我が中立派の災厄が始まるのである。

さうしなければならなかつたか？

全インターナショナルには「宗派」労働組織に對する「後見」組合運動の「分裂」さういふ見地に立つたのだと聲明するか？ それは、勿論、そんなに容易いこゝではなかつた。

そこでロシア中立主義の學者達は次の如き牽制策を執るこゝに決心した。

第一に、倫敦決議はシュツットガルト決議とは似ても似つかぬものである、第二に、シュツットガルト決議は「歐洲に取つては」そんなに悪くないものかも知れぬが、我が罪深いロシアに取つては全く適應しないかの如きこゝを證明するこゝに取掛つた。

この問題に就て當時の議論を特質づける爲に最初の——極めて重要な論文を持つて打つて出たのはエル・マルトフである。『解決されぬ問題』——『科學思想』集、一九〇八年一月第一號)

著者は正統中立主義の從來の陣營から慎重に絶縁し始めてゐる。『經驗は示した——』著者は書いてゐる——大袈裟に吹聴された組合の『中立』や組合の政黨への服従(?)は上記の争議を緩和する所か、却つてこれを激發し、勞働運動が解體させるものである。『著者は』レニンの精神に於て『中立の理論を培養してはならぬ』聲明しやうさへしてゐるのである。

著者は倫敦決議が組合の政黨への服従を劃する紀元であるを宣揚して、両者が漸次に近接すべしといふ課題を宣揚したのではないを稽へて、該決議を論難し、これに泥を塗り、これを改悪しやうとしてゐるのである。

『倫敦決議は急に突發して(!!)——』著者は書いてゐる——不意に設定されたの

で、四圍の調和を破つた、そして『包圍』の状態に陥つた組合が Status quo (即ち舊定則) を主張し始めた時、諸君は組合が獨逸中立派に寢返りつゝあるといふ非難を投じてゐるのである。風を蒔く者は颯風を刈り取らなければならぬ。組合運動の上に頑張るが好い、政黨の組合を以てこの運動を脅すが好い(誰が? 何處で? 何時?) そして諸君は現在の『無所屬主義』の圍内に積み成された協調の行動といふ傳統を勦滅して仕舞ふのだ』

斯うして、シュツツトガルトは酸っぱい顔つきをしながらも融和しなければならないのだ。倫敦は依然として誹謗されなければならないのだ。倫敦がシュツツトガルトと同じことを言つたことは周知のことであるが、而もシュツツトガルトは喧嘩をしなければならぬのである。さればこそ根元的に『突發した』災厄として倫敦決議を描き出してゐるのである。

マルトフに言はすれば、誰かゞ組合の上に『頑張つてをり』、組合を『脅かしてを

り「組合は「包圍」の状態に陥つてゐるのだもの。

斯やうな煽動の眞意は明白である。組合をマルクスの全體に對して嫉しかけ、迂踏を辿つて、勞働インターナショナルによつて排斥された中立主義を植ゑつけやうとしてゐるのである。

この、ロシヤ日和見主義の領袖の論文の抜萃によつて自覺ある勞働者は所謂中立主義なるものは實は政黨に對する争闘を意味するもので、無所屬勞働者を驅つてマルクスの組織に嫉しかけるものであることを明白に看取するであらう。マルトフの一論文は何故に倫敦決議が爾く必然であつたかを充分に説明するものである。即ち、未だロシヤには鞏固な組合がなかつたのに、中立派諸君は既に組合を勞働黨に對して反かせ始めたのである。

だが倫敦ミシュツトガルトに喧嘩をさせるのみでは不充分であつた。シュツツトガルト決議は依然ミしてロシヤ中立派の道に反いて立つてゐた。さうにかしてこ

れを「説明」しなければならなかつた。初めてこの手術に着手したのは同じくエル・マルトフであつた。彼の哲學は簡單である、曰く

「ロシヤに於て、十月「憲法」の時代に（譯者註、ニコライ二世は一九〇五年の革命に鑒みて同年十月十七日に勅令を公布し憲法を與へ國會を開設することを約束した）勞働運動の草分けの時代に、シュツツトガルト決議に指示されてゐる所を民主國の法律に基いて行動してゐる組合政黨の永い協力の望ましい結果として一氣に（？）實現しやうとするのは——組合政黨の組織的聯繫を一氣に創設しやうとするのは新式の機械で裸體に裝飾を施す野蠻人と同じ者になるやうなものである」（同書七五頁、圓點は私が「ジノウイエフが」つけたもの）

この議論の眞意も明白である。多分、シュツツトガルト決議は「歐洲」などには非常に好いかも知れぬが、ロシヤには新式の機械と同様なのかも知れぬ。

我々は何處が木に竹を接いだこゝになるのだらう？

だが、何が故にシュツツトガルト決議はロシヤに取つて爾く役に立たぬのか？  
著者は二つの理由を擧げてゐる。

一、我々は十月「憲法」の時代に生存してゐる。

二、我々は未だ組合運動の草分けを経験してゐるに過ぎぬ。

十月「憲法」は組合の自由を與へてゐない。これは我々が障礙を潜り抜ける方法を探さなければならぬことを意味する。けれども労働組織の二形態の聯繫は就中右の憲法を出来る丈け首尾よく制壓する爲に益々必要になつて来る。マルキストの考察はかうであるが、中立主義者たるマルトフの意見に依れば十月「憲法」に鑒みて組合を労働黨に啖しかけ、労働黨は組合の上に「頑張つてゐる」と叫び、マルクスの全體から何等かの壓迫があるやうに言ひ觸らさなければならぬのである。理論は立派だ！

我々は組合運動の草分けを経験してゐるのだらうか？ 慥かにさうだ！ だがそ

こには正しい原則的土臺を据ゑるこゝが肝腎である。我々は労働運動の若いロシヤやその他の諸國に取つてこそシュツツトガルト決議が最も意義を有するものであるこゝを肯定する。國際労働運動が我々に取つて貴重なのは、それが我々が兄達より學び、兄達の誤謬を繰返さずに、多くの點に於て既に開拓された道を進み得る可能を與へるからこそである。

シュツツトガルト決議は、一體、何人の爲に書かれたものであるか？ 白耳義や奧地利や丁抹や瑞典や諾威の如くそれがなくとも政黨と組合との間に最も密接な聯繫の存在する國々の爲に書かれたのであるか？ 該決議は組合と政黨の離隔が甚だしい佛國の如き、中立主義の殘滓が未だに絶え切らぬ獨逸の如き、未だに組合運動の何れかの道を獲得せんとする運動が行はれてゐるロシヤの如き國々に取つてこそ最も大きな意義を有してゐるのである。

所が我が中立派はシュツツトガルト決議は野蠻人に取つての新式な機械と同様で



あるこいふ考察を以て我々を襲撃してゐるのである。

斯やうな中立運動の害毒は甚大である。若しマルクス派がこの運動に最も断乎たる反撃を加へないならば、彼等は組合と労働黨をみな殺しにして仕舞ふであらう。

如何に中立派の『理論』が實際に適用されたかは第三議會に於けるエヌ・エヌ・チヘイゼの出勤によつて判る。

組合の追窮に關する社會民主派の或る質問が審議されてゐる。果せる哉、問題は追窮に對する抗議の水準には留まつてゐない。ブルジュアと反動派は組合の活動の性質やマルキストとの聯繫や現在の全解放運動に於けるその役割なきに關する問題が持上つてゐる。全議會は、ザムイスロフスキイから立憲民主黨に至るまで、組合に向つて峻厳な中立を宣傳してゐる。次官クルロフは起立して中立に反對するシュツツトガルト決議を朗讀してゐる。

社會民主黨代議士は手袋を上げ、シュツツトガルト決議の擁護の爲に出勤し、ブ

ルジュア『中立主義』の利己心と反動派の警察哲學を弾劾し、労働組織の兩形態の密接な聯繫は『悪だくらみ者』の陰謀の結果ではなくて、不可避であり、歴史的に必然であることを示さざるを得なかつた筈である。要するに、彼等は攻勢に移つて、マルクスの見解を完全に開展すべきであつたのである。

然るに事實はどうであるか？ 我が中立主義の味方は、クルロフは間違つてゐるではないか、一體、社會民主黨自身が中立に賛成してゐるのではないかを證明し始めてゐる。辯解し始めてゐる。攻撃に轉じて打つて懸る代りに、彼等は莫迦氣切つた防禦的位置に陥つてゐる。

そして次のやうなこゝが起つてゐる。

エヌ・エヌ・チヘイゼ代議士は起ち上つて、文字通りに次のこゝを聲明する——

『反對に、組合組織の中立の必要はロシヤ社會民主黨のシュツツトガルト大會並にストックホルム大會に於て明白に指示されてゐる。』(註)

(註) 第三議會速記録一三八五頁、この一例に依つて見るも、少數黨が未だ會  
て中立に賛成したことはないかの如くに「新勞働新聞」に於て確言したアー・ウ  
エー・ゴルスキイはこれだけ眞理に忠實であるかと判る。だがアー・ウエー・ゴル  
スキイの私に對する評論の眞實さに就ては何時か語ることにする。  
繪畫だ！ 勿論、エヌ・エスチヘイゼは最も善良な意圖から出發したのだ。彼は  
勞働組合を追窮する謂れがないことを第三議會に説明したかつたのである。だが第  
三議會には「勞働者を擁護する爲に」「諸君、諸君は何が爲に勞働組合を追窮するの  
か」と言つた無邪氣な勞働黨員がある。

チヘイゼは中立主義の擁護を以てマルキストを破天荒な状態に置いて仕舞つた。  
議會に於ける我々の敵はチヘイゼがシュツツトガルト大會の決議を、神秘的病氣ミ  
して、曲解してゐるか或はそれを黙殺してゐることを容易に立證した。ブルジュア  
や反動派が斯やうなことを立證しまいと思ふのはお芽出たい。その時、一マルクス

機關紙は、残念ながら、我々の敵は社會民主黨代議士チヘイゼよりも正確にシュツ  
ツトガルト大會の決議を説明したと書かざるを得なかつたのである。

カウツキイはシュツツトガルト決議は中立主義に止めを刺してゐると聲明した。  
所が我がロシヤの中立派はマルトフの尻に跟いてこの決議を中立主義的精神に於て  
「解明してゐる」のである。無論、さういふ解明からは勞働者の仕事に取つて害悪よ  
り外に何ものをも得られなかつたのである。

チヘイゼ派の一部分が(高架索派)、否チヘイゼ自身が後に議會の演壇から前言の  
謬りであつたことを自認したのは見上げた態度と言はなければならぬ。

だがマルトフや他の中立派は依然として斯やうな政策を擁護し、これを創造の眞  
髓に奉つてゐるのである。

我が中立派の災厄は、彼等の動搖と困惑は、勿論、第一に彼等自身を笑止なもの  
とした。だが、その迷惑は有害である、そして我々の全事業に害悪を及ぼしてゐる。

さればこそ中途半端な中立主義この争闘は「正統」中立主義この争闘よりも根氣が必要である。マルキストはこの争闘を行つてゐるのである。

そして労働運動の進行はそれが効果を齎しつつあることを示してゐるのである。

自覺ある各労働者の義務は混惑者や動搖者に對してこの成功を勝ち得るやう、マルキストを扶助するに在る。

### 第三章 労働組合

#### 一、労働組合とは何ぞや

この質問に答へるより容易なことはないやうに思はれるであらう。「労働組合とは何ぞや」を定義づけるに方つては大した意見の疎隔などは有り得ないやうに思はれるであらう。

所が實際は適かにさうでない。若しも諸兄が此の質問を獨逸尊僧組合(「基督教組合」)の活動家や自由主義ブルジョア労働組合の活動家や舊學派の英國トレード・ユニオンに提出したとすれば、彼等は組合運動中に働いてゐるマルキストの答へは非常に異つた答へを與へるであらう。そればかりではない。自分も社會主義者も、否社會民主主義者も數へ込んで組合運動の活動家の間にはこの問題に關し

て完全な一致が存在しない。

加特力「労働」組織の理論家に、その意見では、労働組合は何ぞやを質ねてみるがい。

「労働組合とは——『基督教』社会労働運動の主要な理論家の一人であるフォン・カテルレルは貯蓄金庫の設置及賞與の制度を以て労働者の間に於ける宗教性道德を高め、労働者の生活の物質的改善を望む組織である。主人と労働者の間の不平等は至高者の設定である。』それ故に——他の有名な『基督教的』活動家たるドクトル・ムフアングは云ふ——労働組合は給業者（企業家）に對して争闘するものではなく、單に資本の法外な非妥協性に對して争闘するものである。』

簡單に言へばこれが反動尊僧派の全哲學である。言辭は最も『堂々たる』ものを選び抜いてあるが、その階級的眞意は明瞭である。

今度は自由主義者に、ヒルシュ・ドウンケル組合の理論家に彼が労働組合を何

解してゐるか質ねて御覽なさい。彼は何の逡巡するこゝもなく諸君に答へるであらう。「労働組合」はその利害は實質に於て完全な調和に在る。給業者と労働者の間の矛盾を緩和する方法を以て労働者の状態を改善するこゝを希求する組織である。」

諸階級の各々及與へられたる階級の理論家の各々は「労働組合」なるものゝ理解に労働組織の與へられたる形態の中に自分が見たい欲するものを挿入してゐるのである。

今度は客觀的に労働階級の福祉を希望し、自分を労働者の友達と數へてゐる理論家の群を一瞥しよう。

先づ典型的英國トレード・ユニオンズ心理學者であり觀念論者であるウエツプ夫妻の定義を取つて見よう。

「労働組合は何ぞや」この質問に對してウエツプ夫妻はそのトレード・ユニオンズム史の中で次の如き答へを與へてゐる——

「労働組合は賃銀を擁護し、且之を引き上げる。ここを目的とする労働者の永続的結合である」(圈點はジノウイエフが附す)

此の定義を與へるに際し、著者は必ずや一語一語を熟慮したに相違ない。そしてどうなつたか？ 労働組合の全意義は、トレード・ユニオニストの見地からは、賃銀の擁護を引上げに汲み盡されてゐるのである。これは妥當であらうか？ 勿論妥當でない。高い賃銀の爲の争闘は、疑ひもなく、労働組合の大切な課題の一つに屬する。だが之は幾つもの課題の一つである。組合は、例へば、尙労働時間や其の他の爲に争闘する。組合は、それが狭い組合の範圍に閉ぢ籠らぬ限り、政治運動に參與する。

何故にウエツプ夫妻は賃銀の擁護を引上げのみを擧げたのであるか？ 何故なれば、彼等は一定の發達の階梯にある英國トレード・ユニオニストの経験を綜合したに過ぎぬからである。何故なれば、マルキストでない彼等は組合運動を與へられた

時期の見地から見て、發達の見地から見ないからである。

若しくは獨逸の社會改革者たる有名な著述家のエル・ブレンタノミウエー・ゾムバルトが與へてゐる定義を取つて見やう。

「労働組合は——彼等は言ふ——失業の時にその組合員に扶助を示し雇傭契約の締結の際に其の利益を擁護することを目的とする労働者の團體である。」(註)

(註) ブレンタノ氏『Handwörterbuch der Statswiss』及ゾムバルト氏『Dennoch』(ハナ、一九〇〇年)参照

此處では亦定義が不完全で現實を無視してゐる。失業者に對する扶助を雇傭契約締結の際に於ける労働者の利益擁護は、勿論、労働組合の圈内に入る。だがこれは再び全體の一部分に過ぎない。ブレンタノ及ゾムバルトは最も多く自分達の眼に投じたことを綜合したのである。ブルジュアの——非常に急進的なブルジュアではあるが——觀念學者たる彼等は社會主義者の眼を以て組合運動を眺めることが出來な

い。そして彼等はブルジュアに取つて最も受け容れ易い組合の機能を労働組合の活動の永久的、絶對的標準に擡ぎ上げてゐるのである。

社會民主黨の見地に立つてゐる組合運動の活動家の中には觸れられた問題に對して全く正當な見解が存在してゐる。次に高く尊敬される労働組合の二人の歐洲社會民主主義活動家の定義を擧げやう。

奧地利労働組合の史論家たるユリウス・ドイツは言ふ――

「現代労働組合は與へられたる職業の労働者の利益を擁護することを目的とするが、第一着に一般に労働条件の改善の爲の争闘を目的とする同一職業の労働者の結合である。」(註)

(註) ユー・ドイツ獨逸版歴史、四頁。

奧獨労働組合社會民主主義活動家アドルフ・ブラウンは言ふ――

「労働組合は労働条件の改善及其の改惡に對する争闘を目的とする同一種目の雇傭

労働者の結合である」(註)

(註) アー・ブラウン獨逸版「労働組合」五頁。

上述の事によつて、此の兩定義は不充分であることが明らかやうである。ユー・ドイツが「同一職業」に就て言ひ、「與へられたる職業」に就て言ふのは正しくない。ユー・ドイツ及アー・ブラウンが労働条件の改善に就てのみ語り、資本主義制度を廢棄せんが爲の争闘に參與するこいふ組合の課題を指示してゐないのは、不完全な定義を與へてゐるこいふべきである。

労働階級の大先生たるカール・マルクスは半世紀も前に、労働組合は何ぞや(又、何でなければならぬか)こいふこいものもつゝ完全なもつゝ正確な定義を與へたのである。彼は自分の見解を全く完結した公式を以て表現してはゐない。けれども、その個々の言辭から容易に彼の見解を設定し得る。

彼の有名な「哲學の貧窮」に於てマルクスは言つてゐる――

「……同盟(若しくは労働組合)は、労働者間の相互競争を終熄せしめ、よつて以てその資本家との一般競争を可能ならしめるこいふ二重の目的を常に追求してゐる。縦令、抵抗の最初の目的が賃銀の與へられたる水準の支持に過ぎなかつたにせよ、資本家が、自分達の立場を以て、壓迫せんが爲めに結合するに従つて、初めに孤立してゐた同盟は群體を形造るに至る。そして結合した資本を眼前に控へては、組合の支持がその團體に取つて賃銀の水準の支持よりも必要になつて来る。これは英國の經濟學者が、是等の經濟學者の意見に依れば、賃金の支持の爲にのみ創設された筈の組合の爲に稼ぎ高の大部分を寄附してゐる労働者に驚いてゐる程に尤もなこゝである。この争闘に於て——眞の公民戦に於て——來るべき戦闘に必要な凡ての要素は結合し發展した。一旦此の地點に到達した組合は政治的性質を採つて來る。」(ロイヤ版一二八頁)

讀者は見るであらう、マルクスが労働組合の課題は賃銀の爲の争闘に盡きるこ教

へた(現今の急進的教授達のやうに)英國の經濟學者を嚙つてゐるのを。マルクスは言ふ、組合自身は一定の階梯に於て政治的性質を採つて來る。マルクスは「公民戦」に就て語り、「來るべき戦闘」に就て語つてゐる。マルクスが労働組合に如何なる課題を負はしてゐるか明瞭である。

マルクスもエンゲルスも労働組合を「ソシアリズムの學校」に一度ならず名づけてゐたこゝは周知のこゝである。これは單なる労働及雇傭契約條件の改善の爲の争闘は全く別のこゝである。そして、最後に、一八六六年のインターナショナル・ジエネバ大會で採擇された決議はマルクスの手になるものであるが、其の中に我々は次のこゝを読む——

「労働組合は是まで餘りに其の注意を直接に資本家の地方的衝突に集中してゐた。組合は未だ全雇傭労働制度及現代の生産方法に對する争闘に於ける其の全意義を充分に理解しない。……それ故に組合は一般の社會的及政治的運動から餘り遠く懸け

離れてゐる……組合は此の目的に（勞働階級の完全な解放）に導く一切の政治的及社會的運動を支援しなければならぬ。」

これは約五十年前に書かれたものである。今や階級争闘の深刻になつた現在に於て、マルタスは、勿論、組合の中立主義に對する、その政治生活からの絶縁に對する、そして單に給業者との争闘の場内に閉ぢ籠ることに對する争闘をもつて強めるに相違ない。

上に擧げたマルタスの言には勞働者の職業組合が何でなければならぬかといふことに對する唯一の正しい回答が包含されてゐる。マルタスの言葉に倚賴し、世界勞働運動の豊富な経験を計量して、次の定義を抽出することが出来る——勞働組合は、主として、勞働者の経済的争闘を指導して、雇傭奴隷制度の廢棄及生活の改善に於ける完全なる平等權の設定を期する勞働階級の全解放争闘に不斷に參與する爲の與へられたる生産の永続的結合である——

此の定義も亦、勿論、汲み盡されたものではない。此の定義は多くの細目や其の他を捉へてゐない。だが主要な點は、指摘されてゐると思ふ。

それならば何故に政黨と組合とを區別するのだと我々に反駁するであらう？ それならばサンチカリズムは正しいではないか？ 否。それならば我々には「組織的一元論」を即ち何等かの單一組織に於ける経済的及政治的争闘の合流を設定する譯には行かないか？ 否。

さうでない、決してさうでない。サンチカリストの罪過はその優秀な者が勞働組合の社會主義の爲の争闘に於ける参加の必要を強調してゐる事にあるのではない。彼等の罪過は彼等がプロレタリアットの全解放争闘を指導すべき勞働階級の自立的政黨の必要なるものを否定することにあり得るのである。

政黨と組合との間の分業を廢棄するのは後へ向つて一步をなすことを意味するであらう。この分業は全世界に於ける勞働運動の全行程によつて惹起され、その全経



驗によつて確認されたものである。此の分業は必然である。だが労働運動の主要な兩形態間の最も密接な聯繫は等しく必然である。

労働運動を切り崩し、これに害悪を齎らすサンチカリストは正しくない。組合は主として経済的争闘を指導し、黨は主として政治的争闘を指導しなければならぬが、それと一緒に黨は経済的争闘に於ける参加から拒絶し組合は政治的争闘に於ける参加から拒絶してはならぬことを指示した所のシュツツトガルト國際社會黨大會は正しい。

シュツツトガルト決議の言葉を以て言へば——「プロレタリア階級争闘の益々擴大する領域が存在してゐるが、その領域に於ける成功は政黨組織及組合組織の同心的協同的行動の助けを藉りてのみ貫徹されるものである。」

ロシアに於ても正統マルキシズムの見地は右の如くである……此の見地は全くシュツツトガルト大會の見地と合致するものである。

## 二、労働組合は何によつて生きるか？

我々は、先づ、労働組織の一定の自由が存在し、組合が故障なく働き得るやうな國の労働組合に就て語り、踵いで、階級争闘の地盤に止まつてアナーキズム（サンチカリスト）の方へも狭い組合主義（トレード・ユニオンイズム）の方へも傾かない組合に就て語つてゐるのである。我々は、要するに、通常の組合に就て、即ち全世界の労働運動が漸次に進みつゝある階級組合組織の型に就て語つてゐるのである。

斯やうな階級労働組合は何によつて生きるか？ 其の仕事の内容はどんなものであるか？ 斯やうな組合は何を以て益々多くの労働大衆を其の圏内に索引しつゝあるか？

獨逸「自由」労働組合の——世界中で最も強力な組織——の首領たるレギンは此の質問に對して次の如く答へてゐる——

「労働組合の全活動は——彼は言ふ——次の數言に之を盡すことが出来る。即ち組合員中に於ける啓蒙の仕事と遅れてゐる労働大衆の組合への吸引即ち宣傳である。労働者の状態の改善、賃銀の引上げ及労働時間の短縮即ち罷業である。労働する諸階級の状態に關する材料の蒐集即ち統計である。是等の主要な課題を携々しく實現する爲には失業の場合や求職の旅行に當つる相互扶助や労働局の設置や組合員の職業教育の援助である。」(Legin, "OrganisationsOragen" 114頁)

此の定義では獨逸に於ける労働組合が何によつて生きるかと可なりに詳しく描説されてゐる。無論、陳腐な、組合學派の英國トレード・ユニオニストなどが罷業や宣傳などを爾く強調し得ないであらうといふことは疑ひがない。だが此の定義は、こは言へ、凡てを盡してゐないが、此の中には獨逸「自由」組合が實際に於て無條件にやつてゐる組合の特殊な政治的活動が示されてゐない。此の活動に参加しなければ、今や、階級的労働組合なるものは考へられない。それから此處には最終目的の

宣傳即ち現代組合運動の生きた精神を構成してゐる事柄が強調されてゐない。

カウツキイは労働組合の全活動を二つのグループに區別してゐる。マンハイム大會(一九〇六年)に於ける有名な演説に於てカウツキイは、労働組合は何によつて生きるかといふ質問を自らに課し、「労働組合の牽引力は、抑々、何の中に包含されてゐるか」といふ質問を出し、それに對して次の如く答へてゐる——

「第一に、相互扶助の設置と、第二に、組織の戰闘的活動の中に」(マンハイム大會の議定書二五八頁)

カウツキイの此の分類は全く妥當である。階級的労働組合は、第一に、經濟的戰闘的(團結的)活動によつて、第二に、相互扶助によつて實際に生きてゐるのである。第一は主なるもので、第二は従たるものである。如何なる組合も相互扶助を拒絶することは出来ないし又してはならぬ。だが西歐に於ては、常規の條件に於ける其の主要な仕事は依然として經濟的争闘の指導、労働階級の政治的代表の出動の支援及

最終目的の宣傳である。

現代の勞働組合は今や一にして戰闘的活動を餘所にし、經濟的戰闘を餘所にしては濟まなくなつた。ブルジョア自由主義的勞働組合すら、反動「基督教的」組合すら團結的經濟的争闘を行はざるを得ないのである。勞働者は兎も角も其の組合員になつてゐるが、其の状態は極めて苦しく、爲に階級的矛盾は日毎に充進して是等のブルジョアの組合の遅れた組合員すら、若しブルジョアの指導者が一切の團結を妨げず、又勞働者を相互扶助及德育的宣傳のみを以て養つてゐるならば、是等のブルジョア指導者に裏切つて仕舞ふであらう。

眞の階級的組合の状態は、戰闘的經濟的活動が第一位を占め、相互扶助が第二位を占める時に現れるものである。此の關係に於て一方より獨逸に於ける「自由」組合、他方より英國に於けるトレード・ユニオニストが二つの相異なつた型である。何れの組合でもその支出豫算に依つて其の戰闘的若しくは非戰闘的性質を最もよく推察

し得る。

獨逸勞働組合は一人の組合員に對し一年に次の如く消費した(單位馬克)

年次	一八九三	一八九五	一八九八	一九〇〇	一九〇二	一九〇四	一九〇五	一九〇六
糧	〇、五二	一、一三	二、三九	三、八七	二、六七	四、三七	七、一九	八、一四
救	〇、一七	〇、二一	〇、一〇	〇、一七	〇、三八	〇、六〇	〇、三八	〇、四九
旅費の扶助	一、八六	一、五一	〇、七〇	〇、八〇	一、一八	〇、七七	〇、七〇	〇、六二
失	五、〇四	三、〇三	一、七四	二、三九	四、五九	二、九六	二、二五	二、三三
病	一〇、一四	八、八五	三、一一	一、一八	三、九五	二、六〇	二、三〇	二、六〇
死	—	—	—	—	—	〇、三九	〇、三七	—
傷	—	—	二、六七	三、六〇	二、六六	二、九三	三、七九	四、三九

(註) 右の材料はグスタフ・ブリュッゲンゴルフ博士の「Das Unter Stenitzungs-wesen bei der deutschen Freien Gewerkehaften」の頗る興味ある著作か

ら借用す(一〇四頁)

尙最近の資料に依るに「自由」組合は罷業に對して一九〇七年には千三百十九萬六千三百六十三馬克を、一九〇八年には四百八十一萬九千三百九十九馬克を、一九〇九年には六百九十萬四千四百三十一馬克を、一九一〇年には一千九百六十萬三千六百〇五馬克を、一九一一年には一千七百三十萬三千三百二十八馬克を、一九一二年には一千二百四十八萬五千八百八十三馬克を支出したことを附記して置く。一八九一年から以後の二十二年間に社會民主的組合は罷業に對して一億二千五百五十萬馬克を、失職者に五十四百萬馬克を、救援に九百四十萬馬克を支出した。一九一二年に組合は一人の組合員に付て罷業及救援に對して五、四六馬克を費したのに「基督教」組合は同一の目的に對して僅かに一、九馬克をしか費さなかつた。即ち三分の一にも足らなかつた。

右の表は現代の階級勞働組合が何によつて生きてゐるかを理解せんことを欲するものには深甚の興味を提供するものである。お前は自分の金をどんな工合に費つてゐるか、俺に言つて御覽、さうすれば、俺はお前の組織がどんなものであるか、其の組織が何によつて生きてゐるかを言つて見せやう。

右の表で何よりも先に眼につくのは罷業に對する支出が一年毎に膨勃して増大しつゝあることで、一八九三年から一九〇六年までに十六倍に達してゐる。近年に至るに罷業に對する支出は他の全支出を合算したと殆ど同額を構成してゐる。戰亂的目的の爲の支出には救援や旅費の扶助や失職者への扶助も加算しなければならぬ。此の三種の扶助は罷業と密接に關係してゐる。救援費は大部分が罷業の後に盡き散らされるものではないか。

罷業に對する支出は獨逸に於て次の比例を以て増大してゐる。一八九三年には六、六%を構成してゐたものが、一八九五年には一九、六%を一八九八年には四六、三%

を、一九〇〇年には五六、四%を、一九〇二年には六一、〇%を、一九〇六年には六〇、四%を構成してゐるのである。

獨逸自由組合は純罷業活動に對して一留の内から六十哥を支出したのである。戰鬪的扶助の他の種目を加へるならば、戰鬪的活動に對して獨逸組合は八〇%を費し、他の費用は僅かに二〇%にしかならぬことになる。

獨逸組合は何によつて生きてゐるか？ 五分の四だけは戰鬪的、罷業的活動によつて、經濟的争鬪及一般政治的出動に於ける参加によつて生きてゐるのである。

社會主義及プロレタリア階級争鬪に無縁な英國の組合は近頃まで（一部は今でも）他の光景を呈してゐた。一八九五年から一九〇四年までの十年間に英國の主要なる百個の組合は其の全必要に對して一億六千萬留を支出した。右の金額から二千三百万留即ち約十五%は罷業及一般に主人との争鬪に使用され（穩健なムジエーフ氏は其の「英國勞働組合」なる著書に於て之を「企業者との紛擾」を表現してゐる。）三千

六百萬留即ち約二十三%は失職者の扶助に消費してゐる。病人や、不幸な目に遭つた者や、過老者や葬儀等には六千七百萬留即ち全額の四十一%を使用し、其の他の費用に三千五百萬留即ち三十二%を消費した。豫算の立て方が此處では著しく異なつてゐる。此の相違には英國型の組合と獨逸型の組合との活動が相違した點が現れてゐる。英國のトレード・ユニオンは罷業的活動に對して即ち純戰鬪的活動に對して一留の内から十五哥しか費つてゐない。英國のトレード・ユニオンは戰鬪的活動によつては僅かに七分の一だけしか生きてゐない。そして七分の六だけは相互扶助と慈善によつて生きてゐる。それ故にこそトレード・ユニオンは爾くブルジョアジヤの御氣に召したのである。それ故にこそ英國では「石工が大臣になれる」所の「社會平和」(ムジエーフ)のバレストアインに見られてゐるのである。

だが近年に至つて階級争鬪の進行は此の國に於ても勞働者が従順な子供であつた時代に終焉を置いたのである。英國の炭坑夫や鐵道従業員の大罷業はブルジョアジ

ヤを以前よりも薔薇色の鮮かな考慮へこ連れ込んだ……調停委員会の時代は漸時に過ぎ去つて、罷業の時代は漸時に襲來しつゝある。英國及獨逸の組合は右の如きものによつて生きてゐるのである……

然らば、労働者に取つては如何なる型タイプが望ましいか

カウツキイはそれに就て次のやうに言つてゐる――

「組合は相互扶助の仲介に依るも廣汎なる團體を網羅することは出来ない。是は英國の例が示す所である。相互扶助や會費の額等は賃金の額に倚るものである。相互扶助の額が高ければ高いだけ組合員の團體は高い賃銀を有する労働者に局限されて仕舞ふ。是は英國の組合が示す所で、其の組合員の數は既に十年間も停滞してゐる。然るに獨逸の組合は尨大なる發達を遂げた。」

「是は如何に説明すべきであるか？」

「英國の労働者は組合を社會主義的精神を以て充たすべき社會民主黨が不足してゐるが故に其の組合が遅れてゐるのだといふことを自覺したのである……英國に於て我々は恰も組合の中立を見る。彼等には社會民主主義が足りない。是は社會民主主義が獨逸労働組合に力を與へたことを最も良く立證するものである……獨逸自由組合は、その『中立性』に就て何と言はれやうが、人民の大衆によつて社會民主的組合と見られてゐるのである。此處に其の組合の幸福がある。此處に其の牽引力がある」(註)

(註) マンハイムに於ける演説、議定書二五八頁。

西歐に於ける労働組合に關するカウツキイの言葉は右の如くである。カウツキイの言ふ事は如何にも尤もである。労働組合が自己の中に閉ぢ籠らず、『中立』のかけに隠れず、單に相互扶助に局限せざる時に始めて組合は充實せる生命を以て生活し、始めて最大限の力を發揮し、始めて勇敢で清新の氣が横溢するのである。マルキストは決して相互扶助を否定してゐない。之に就ては如何なる誤解をも許容してはな

らぬ。自由派や修正派が右の非難をマルキストに浴びせ掛ける時、彼等は眞理から退却するのみである。

(註) 獨逸自由派のハイルボルンは其の『獨逸組合に就て』の中で恰もマルキストが主義の名に於て相互扶助を否定してゐるかの如くに説いてゐる——獨逸版六七頁——即ち貧窮説の名に於ても悪ければ悪い程好い。此の出鱈目は全心を擧げてマルキシズムを嫌惡する自由派に取つて典型的なものである。

だが相互扶助は從の位置を占むべきものである。社會問題は病氣や葬儀や出産の場合に於ける扶助の如き手段を以て解決され得るものではない。階級争闘の荆棘の道に於てのみ該問題の解決を求めなければならぬ。此の道は長く、難く、種々の障害が撒き散らされてゐる、だがそれは唯一の道である。此の道を辿つて、労働者を労働の賣り手である所の状態から拯ひ出さうと望む凡ての労働組織は進まなければならぬ。これは労働組合に取つて唯一の正しい道である。各組合は最初の首位に此

の大目的を提起しなければならぬ。此の道が正しいことは凡ての組合員がおいそれ、納得するものでない。或る者は、最初の程は、即ち相互扶助の爲に、組合は直ぐに即座に生活のあらゆる場合に扶助して呉れるといふ誇張されたる期待の爲に、組合に加入するものである。それ等の場合に於ける失望は避くべからざるものがある。然る時は組合からの脱走が始まる。だが時は來るだらう。荒々しい階級争闘の行程は組合の力が何にあるかを皆に教へるであらう。

最近に發表された獨逸組合に於ける組合の循環に関する資料は極めて興味あるものである。何れの労働者でも組合に加入するものは永く組合に残ることは遙かに言へない。百人の加入者に就て我々は、平均八十人の脱退者を見る。例へば、獨逸金屬工組合に就て見ると、一九〇七年に十六萬三百五十七人の新組合員が加入したが、十三萬三千二百二十八人の舊組合員が脱退した。一九〇八年には十萬八千四百七人の加入で十萬八千五百八十五人の脱退であるから殆ど兩者は同數である。一九一〇

年には二十萬九千六百六十六人で十一萬八千四百九十九人。一九二二年には十六萬七千七百八十三人が加入し、十三萬六千五百五十六人が脱退した。其の他の組合に於ても同一の現象が看取される。製材工にあつては六年間に、平均、百人の新加入者に對して八十五人の舊組合員が脱退し、紡織工にあつては百人に對して八十人、運輸労働者にあつては百人に對して七十人の工合であつた。

何處から此の大衆脱走が生ずるか、何處から此の加入と脱退が好況の年々にも恐慌の年々にも通例となつて來たか？ 主要なる説明は新組合員が常に最初から組合の課題を正解するものでないことに存する。彼等は組合が彼等に與へ得ぬものを組合に求める。

彼等は組合を直ちに扶助を與へなければならぬ相互扶助の金庫を見て、永い且苦しい階級的争闘の組織は見ない。年を重ねるに従つて始めて労働組合の眞の性質を悟るのである。

此の間に在つて組合の日和見的幻想は組合員に何の効果もない。組合は、何事にも拘らず、組合が在らねばならぬものに留まらねばならぬ。然る時始めて組合は其の大課題を實現するであらう。

階級労働組合は何によつて生きるか、何によつて生きなければならぬか？ 労働者の経済的争闘（罷業、ストライキ、工場閉鎖の攻撃など）の指導によつて、文化啓蒙活動（講演、報告、圖書館、雑誌など）によつて、相互扶助の設置などによつて生きなければならぬ。だが組合は右の凡ての仕事に於て労働運動の最終目的を以て自らを指導しなければならぬ。

### 三、労働組合は労働者に何を與へるか？

「歐羅巴に於けるブルジョアは労働運動を防止するのに單に警察の威嚇に依るのみならず、労働者を『思想上』に説得する方法に依る。ブルジョア學者と政治家



ミは階級労働組合が労働者自身の利害の見地から無用であり且有害であるかの如く労働者に「証明」しやうと努めてゐる。

「失禮だが、お前達の社会民主労働組合はお前達からお前達に與へるよりも多くを取立てゝゐるぢやないか」ミ彼等は労働者に叫んでゐる。

「さうだ、お前達はお前達の社会民主労働組合がお前達の自由を窮迫し、お前達の銘々が自分自身を自分自身の福祉に就て心配するのを妨害するのみである事に果して氣が付かないか」ミ他の者は色々の聲で繰返してゐる。

茲に最近の一例がある。丁抹では労働組合に組織されたる者の割合が極めて高い。そして組合は社会民主黨ミ最も密接な、斷ち難い羈絆を以て結ばれてゐる。此處ではブルジュアジャは、殊に烈しく労働組合ミいふものは労働者自身に有害なものであるかの如く「証明」してゐる。」

例へば、ビスガルドミいふ博士は、曩頃、次のやうな推算を爲した。一八九六年

から一九〇一年までの間に——ミ彼は言ふ——労働者は六%だけは賃銀の増大を獲得した。これは労働者に六百三十萬馬克だけは賃銀の總増しを與へたのである。然るに右の期間に労働者は其の組合に會費ミして罷業基金などに約千馬克を納附してゐる。労働者が組合に與へたものは組合から受けたものよりも多いことは明らかでないだらうかミいふ。労働者が三百餘萬馬克ミ自分の懐から投げ出したことは瞭然たることではないだらうかミいふ(即ち千萬ミ六百三十萬ミの差額を)

例へば、丁抹社会民主労働組合の首領イエンセンは錢袋の「學問ある」辯護士に彼が擧げた數字は正しくないことを説伏するやうに證明した。だが之は大したことではない。特質あるは一般にブルジュア諸君の考察である。大ザツパな錢勘定より外には何にも彼等の頭にはやつて來ないのだ。收入ミ支出——それがブルジュア諸君の經典なのだ。若し支出が收入を超過すれば、企業が不利益であることが明かなのだ。此の物さしを持つてブルジュアは労働者の職業組合に臨むのである。ブルジュ

アの理解の圈内へは労働組合が商事企業を極めて鮮しの共通點をしか持つてゐない  
 こゝや労働者がもつ高遠な目的の爲に金銭上の犠牲に向つて進み得るこゝは到達  
 しないのである。

賃銀の引上げや労働時間の短縮の爲の争闘、一般に労働条件の直接改善の爲の争  
 闘は一切の先驅労働組合の最も重要な課題の一つではある。だが之は其の課題の  
 一に過ぎない。階級労働組合は、例へば、又、文化啓蒙的課題を自己に課してゐる。  
 そして組合がそれが爲に消費する金銭上の支出等は苟も自覺せる労働者は之を不生  
 産的の見做すこゝはないのである。階級争闘の見地に立つてゐる組合は往々社會民  
 主黨の金庫に其の資金を據出して政治的争闘や社會主義的宣傳や社會民主的新聞の  
 費用に充てゝゐる。ブルジュアの見地からすれば、これは、勿論、つまらぬ「棄て  
 金」である。自覺ある労働者は、職業組合の組合員はさうは思はぬのである。

眞に進んだ労働組合は、どれだけ労働者の賃金を引き上げ、労働時間を短縮する

こゝが出来たかといふこゝで其の成績を測定するこゝは出来ないのである。賃  
 金を増大するこゝは眞に労働者の生活の水準を引揚げるこゝを常に意味するもので  
 はない。時として、例へば、日用品の価格は賃銀よりも迅速に増大する。即ち、稼  
 ぎ高は十%だけ即ち一留から一留十哥まで増大したのに、麵麩や家賃や其他の價格  
 は同時に十五%だけ即ち一留から一留十五哥まで増大したとすれば、此の場合、勞  
 働者の生活条件は良くならないで悪くなつたのである。労働時間の短縮に就てすら、  
 それが常に労働者の生活条件を好くするものとは言ひ難い。若しも、例へば、或る  
 工場に於て労働時間が半時間だけ短縮されたが、テイラーの汗の搾出法が施行され  
 て居れば、即ち労働の烈しさが「米國流」の程度にまで引き上げられてゐれば、此の  
 半時間だけの短縮は實際に労働者の生活条件を改善したと殆ど言ひ難い。雇傭勞  
 働搾取の資本主義的方法は複雑な現象である。

確信を以て言ひ得る一事は階級職業組合がなければ、雇傭労働者の労働条件は今

よりも千倍も悪いであらうといふ事である。

現在のブルジュア社會に於ては労働者を貧窮者の水準に保持し、プロレタリアに辛うじて其の生存を維持し得るやうに其の創造せる價値の分け前を分與しやうとする希望が疑ひもなく存在してゐる。社會主義者は今や賃銀の「鐵則」を信じない、彼等は鞏固なる労働組織、戦闘的労働運動が現存するに於てプロレタリアットは雇傭主から穩かに純肉體的半家畜的生存の維持にしか足らぬ分け前よりもつゝ多量な分け前を撈ぎ取るこゝが出来ることを知つてゐる。

自覺せる労働者は資本主義組立てが存在してゐる限り、自分が雇傭奴隷として残ることを知つてゐる。之に就て彼には何等の幻影もなく、何等の偽れる期待もない。彼は如何なる賃金の引上げもプロレタリアットにブルジュアジャミの間の溝渠を湮滅せざる事を、奴隷制を湮滅せざる事を、社會平等を創造せざる事を熟知してゐる。それ故に彼は労働組織が——政黨も、組合も、コーペラチヴも——其の最終

目的として社會主義の爲の争闘を置くやうに欲してゐる。

だが自覺せるプロレタリアは社會主義の爲の成果ある争闘には今や其の生活の水準の引上げを——もつゝ好い賃銀、もつゝ短い労働時間を獲得しなければならぬことを知つてゐる。そして之が爲め強力な階級職業組合は換へ難い武器である。

此の點に於て労働組合は労働者に何を與へるか？ 我がロシアに於ては此の質問に對して掌中に精確な數字を擧げて答へる事は困難であらう。ロシアでは組合は其の根本課題を、即ち經濟的争闘や罷業などの指導を遂行することには追窮が厳しいから出来ない。だが労働階級が苦しい争闘を以て既に一定の（極めて不充足ではあるが）政治的自由を即ち團結や組合の自由を獲得するに成功した幸福もある。そこでは労働組合は掌中に數字を握つて、恰も組合が労働者に與へる所は組合から取る所よりも少いかの如く説いてゐるブルジュア犬儒のお伽噺を否認することが出来る。

獨逸の社會民主労働組合を取つて御覽なさい——それは今や全世界で最も強力な

組合である。彼等は諸君に確答するであらう——是々の年には（例へば一九〇六年には）組合は其の争闘を以て次の如くに労働時間の短縮を贏ち得た……

八一、六六六人の金屬工に付	……一週間に	二七二、〇〇二時間
七八、三五八人の建築工に付	……一週間に	三一七、二五二時間
八一、一五六人の紡織工に付	……一週間に	二九一、六八一時間
三九、九五七人の製材工に付	……一週間に	一〇九、六〇一時間

前記の年に獨逸に於ける社會民主労働組合は三十三萬九千四百六十九人の労働者の爲に一週間に百二十四萬八千百九十九時間丈け労働時間の短縮を獲得し六十九萬一千七百三人の労働者の爲に一週間に百二十九萬七百三十六馬克丈け賃銀の増大を贏ち得たのである。

茲に労働者といふ労働者は我々我が眼を以て職業組合の巨大な効果を見、謂はゞ、階級組合運動の偉大な結果を自分の手で感觸するこゝが出来るのである。無論、經

済的争闘に於ける勝利には労働組合を能動的に援助する社會民主黨が鮮ならず與つて力がある。だが経済的争闘の直接指導は組合に屬する。そして年毎に経済的争闘は渺々しく進んで行く。罷業に於ける全幅的及部分的捷利のパーセントは大きい。即ち、獨逸に於ける攻勢的罷業に際して全幅的及部分的成功は一九〇五年に九六、四%を、一九〇六年に九七%を、一九〇七年に九四%を、一九一一年に九六%を構成した。

茲に「労働組合は労働者に何を與へるか」の質問に對して如何なる言葉よりも雄辯な右の如き數字を以て答へるこゝが出来る。茲に組合運動は自らの爲に宣傳をしてゐるのである。

時期は來るであらう——我がロシヤの労働組合も右の如き巨大な數字を擧げ得るであらう。此の時期は我々が「政治」を「経済」を結び着けるこゝが密接なれば密接な程、労働黨と労働組合が互に近接すれば近接する程、運動が舊い道を辿つて正統

マルキシズムの千切られぬ標語の下に斷乎として進めば進む程、早く到來するであらう。

けれども「教養ある」ブルジュア諸君は、まだ労働組合が單に物質上のみならず、精神上に於ても労働者を「掠奪する」に吹き立てゝゐる。

既に佛蘭西大革命の後、佛蘭西ブルジュアは法律を發布して（シャペリエ法律）労働者が閉ざされたる組合に「孤立」する事は平等、博愛及自由の主義を破るものであるとの口實の下に労働組合の自由を禁遏した。其の時から多くの水が流れ去つた。だが今でもブルジャ學者や政治家が、例へば罷業破りを擁護しやうとすれば、彼等は「労働の自由」を「個人の自由」の名称を以て之を擁護するのである。つい先般もウエステルガルドといふ一人のブルジュア教授は現下の社會民主労働組合は「其の組合員」の精神上的の自由を侵害してゐる事、かゝる組合の各組合員の上には常に「徹友的社會的意見の支配」がのし懸つてゐる事を證明しやうとした。

占有階級及其の従僕の見地からすれば、労働者が完全に「精神上的の自由」を實現し得る場合は僧侶と製造家の實勢力が跋扈してゐる「基督教」組合に加入するか或は同じブルジュアが跋扈してゐる自由組合に加入してゐる時に限る。

だが眞に労働者の利益に奉仕した凡ての事柄を労働者が自分で解決する社會民主組合——かくの如き組合は労働者の「精神上的の自由」を侵害してゐるのださうだ。かやうな歸結を以て労働者を社會民主組合から逐ひ退けやうと欲するブルジュア教授連が單に菜園の雀を嚇かすのに役立つのみなることは言ふまでもない。即ち、其の最高な宗教上の欲求を充たすの見地から労働者は階級労働組合の中に偉大なる牽引力を正しく見てゐるのである。組合の中に労働者は初めて自分を大きな全體の一部として意識し始めるのである。労働階級の偉大な教師たるマルクス及エンゲルスは労働組合が社會主義の學校であるに疾うの昔しに言つてゐるのである。労働者は組合の仲介によつて賃銀の改善や、労働時間の短縮や、疾病や、失業に臨んでの相互

扶助の設置なきの形態に於て幾多の經濟上の福祉を受ける。そのみではない。組合は、マルクスの言ふ如く、労働者の間の競争を絶つて其の資本主義の一般の競争を可能にする。そのみではない。否、組合はもつて高遠な理想主義的（此の言葉の最も良い意味に於ける）目的を自己に課する一の家庭に労働者を結束させるものである。

現下の階級労働組合は労働者をツエヒ（狭い、他に遮断された昔の組合）的組織に組織するものではなく、生産に依る組織に組織するものである。是等の組織は労働者が狭いツエヒ的利益の殻の中に閉ち籠らぬやうに努力してゐる。奥へられた都市の凡ての労働組合は一般の組織を——組合の同盟を組合する。凡ての諸市の諸同盟は全國に亘る組合の集中されたる組織を建設する。最後に、諸國の組合は労働組合のインターナショナルを形造る。

今日は、獨、佛、露、米の組合が社會民主黨と共に普通選舉の爲に闘ふべく自耳

義の組合を援助し、明日は白、塊、獨の人々が彪大なロツクアウトに對戦すべく瑞典の組合を援助する。明後日は諸場の労働組合が戦争を名づけられる人間による人間の大眾殺戮に對して反對を表示すべく全世界の社會黨と共に集中する。

かく我々は一つの大きな社會現象も労働者の職業組合を除外して通過せぬ時代に益々近づいて行く。組合は労働闘士から自覺せる公民を、自己の階級の目的を理解し、僚友的聯帶を一般の事業の爲に自己を犠牲にする覺悟に貫徹せる人間を作る。組合は労働者を社會主義の爲の直接争闘及社會主義そのものに對して彼に從屬すべき偉大なる役割に訓練する。組合は労働者に政治生活のあらゆる現象に對して眼を開かしめる。

インターナショナルの實際は組合の此の高遠なる使命を多く果せば果す程、労働者はそれだけ大きな密集隊をなして其の組合へ急ぐ。ロシアの組合は「政治」に携はるが故に微力であるこの我が反動派の説法は嘘である。獨逸の組合はロシアの組合

よりも多く政治に携はつてゐる。そして二百五十萬の組合員を數へ、其の發達に於て他の諸國を追ひ越した。

我がロシアの組合はまだ労働者に組合が與へ得るもの及與へなければならぬものを與へない。だが是は労働階級が、まだ労働組合が其の困難な且複雑な、けれども様々な且其の結果に於て豊富な課題を公然と且絶え間なく果し得べき一般の條件を創造しないからに過ぎない。

#### 四、労働組合と相互扶助

我が組合運動が盛になるに連れ、其の眼前には大きな原則上の意義を有し又出来るだけ迅速なる解決を要する組合の實際に關する諸問題が全力を以て起つて來る。斯やうな問題中で主要なものは相互扶助に關する問題である。

此の問題は原則上には我が組合運動のマルクス團によつて疾うに解決されてゐる。

る。労働組合は單なる相互扶助の協會と變り得ないし且變つてはならない。組合は労働者の戰闘的經濟的組織でなければならない。組合は労働者の争闘を指導するもので單に相互扶助や慈善を以て個々の労働者の身の上を緩和するものではない。だが、それと共に、組合は、戰闘組織として残ると共に、其の従たる課題の一として相互扶助を認めてゐる——殊に組合の戰闘的活動と密接に關聯する種類の相互扶助を、即ちロクアウトや失業の場合に求職に依る費用に充つべき扶助を。かやうな精神に於て西歐に於けるマルキストも相互扶助に關する問題を解決しやうとしてゐる。だが、彼等と我々との間の相違は彼等には外部の障礙を顧念する必要がないのに我々には所謂「從屬せざる事情」が我々の凡ての計畫を蹂躪するこゝが珍らしくない。

我々は悉く組合の主要な課題が労働者の經濟的争闘の指導であるこゝを認めてゐる。だがロシア組合の生存の外部條件は恰かも此の主要な課題を實現するこゝを妨

けてゐる。健全なる發達は不斷に阻止されてゐる。そして外部の状態の影響に依り、労働組合に取つて最も困難な時代に於て右翼の或る活動家の中に組合を相互扶助の協會を變へんこの日和見的計畫が発生した。

これはやけ糞の計畫であつた。病人の計畫である。苦しい反革命流な時はづれの計畫である。一九一〇年の始めに「ルースキイ・ペチャートニク」に掲載された一論文に於て組合運動の一活動家は、例へば、次のやうな事を書いた――

「相互扶助は組合の戰闘的目的に比較すれば、小つぽけな、つまらぬ事である。一般に、相互扶助は労働者の全階級の狀態を改善する事は出来ない。その通りだ。我々は決して之を否定しない。だが現在に於て我々は組合の最も正しい目的に自分達のカミ手段を献げる可能を有せず、若しくは此の可能を有するにすら最も微々たる程度に於てあるに於て何をするべき、其の結果に於て我々は殆ど何にも出来ないぢやないか？……大きな仕事がないからには時の來るまで小さな仕事で満足してゐる

やう。今の條件に於て組合はそれが實際の爲に生活へ呼び出された所の課題を果すことが出来ない。仕様がなないぢやないか？　かくの如き窮狀にあつて我々は新たに相互扶助に關する問題を吟味せんことを奨める。」

(「ルースキイ・ペチャートニク」十五號エム・アムギンスキイの論文)

これは眞つ直ぐに絶望の喚きである。而も此の喚きは労働運動の沈衰の時代に取つて極めて特質あるものである。筆者は、勿論、最も善い希望に貫かれてゐる。だが事實に於て彼は困難なる條件に對する降伏へ呼び寄せてゐることになる。組合に於て經濟的争闘を行ふことが出来ないから「小さな仕事」に従事しやう、組合を相互扶助協會に變へやう……

茲には組合の戰闘的活動を相互扶助に對する過てる見解があつた。大きな事をするのが不可能であるが故にのみ相互扶助に従事しなければならぬといふ譯であつたのだ。さりながら之は正しくない。マルキストは組合が戰闘的活動を充分に指導



し得る所でも亦相互扶助を組合の重要な課題の一と數へてゐる。

幸ひにも、此の苦しい問題の提出方は過去へ去つた。蓋し痛ましい病時代は過去に去つたからである。成る程、今でも組合は經濟的争闘を指導するここを妨げられてゐる。だが運動の躍動は、それにも拘らず、非常に壯大なもので、「小さい仕事」の宣傳は今や全く笑止なものであらう。茲に於て我が労働組合は今や相互扶助に關する問題を如何に提出しなければならぬかといふ質問が起る。

最初に西歐では相互扶助に關する問題を如何に提出してゐるかといふ事をもつて近く檢閲しやう。

ブルジュアジャ及其の「學者」の伴れる保證に反して、マルキストは「悪ければ悪い程好い」といふ混沌なる定説から脱出して毫も相互扶助を否定してゐない。獨逸の社會民主「自由」労働組合は多くの關係に於て凡てのマルキストの爲に典型となつてゐる。即ち右の組合は相互扶助に付て一年に數百萬留を消費してゐる。一八九

一年から一九二二年までの二十一年間に例へば失業者の扶助にのみでも六千八百萬馬克(約三千萬留)を使用した。

西歐に於ける社會民主黨は相互扶助を十種に分類してゐる。

- 一、罷業者への扶助
- 二、救援費
- 三、求職の旅費
- 四、指定地への仕事に行く旅費
- 五、其の場所に於ける失業者への扶助
- 六、疾病の場合の扶助
- 七、死去の場合の扶助
- 八、廢失者への扶助
- 九、寡婦及孤兒への扶助

十、其の他の扶助

右の十種は之を二つの根本群に分類することが出来る。第一の五種は組合の戦闘的課題と密接に相關聯し、第二の五種は直接には戦闘的活動とは相關聯してゐないで單に出来るだけ組合員の生活を緩和することに目的を以てしてゐる。

即ち相互扶助は相互扶助に不同な譯である。獨逸の社會民主組合は其の數百萬金を、主として、罷業者や失業者や運動の犠牲者などへの扶助に費してゐる。即ち相互扶助は戦闘的性質を持つてゐるのである。此を以て其の資金を勞働者の争闘と直接に相關聯する事に支出してゐるのである。

英國の穩健組合(トレード・ユニオン)は、之に反して組合の戦闘的課題とは爾く密接に相關聯せざる第二の五種に其の資金を費してゐる。英國の組合は疾病や葬儀などの扶助により多くを支出してゐる。これは英國の獨逸に労働組合の二型(相互扶助の提出方の二型)を創る。

だが之は獨逸に於ける社會民主労働組合が相互扶助に充分の注意を拂つてゐないといふことを意味するものでは決してない。不偏頗なる數字は社會民主組合が此の點に於ても數倍もブルジョア政黨——自由組合(「ヒルシ・ドワンケル」)及「基督聯合」(「基督教」)を遠ひ越してゐる。最近の資料に依ると、一九二二年度に罷業者への扶助に左の如く消費した。(單位馬克)

	組合員	消費全額	一組合に付
社會民主組合	二、五三〇、三九〇	一三、八一七、四〇八	三、四八
自由主義組合	九三、八七七	二四五、一八九	二、六一
「基督教」組合	二三五、一一一	二〇一、二二三	〇、八六
失業者への扶助及消費			
社會民主組合	二、五三〇、三九〇	八、九二〇、三四二	三、四八
自由主義組合	九三、八七七	二四五、一八九	二、六一
「基督教」組合	二三五、一一一	二〇一、二二三	〇、八六

## 凡ての「平和的」相互扶助に

社會民主組合	二、五三〇、三九〇	二二、三七七、〇〇四	九、二四
自由主義組合	一〇九、二二五	三一六、八五六	二、九〇
「基督教」組合	三四四、六八七	一、三四一、九一三	三、八九

右の數字に依つて見るに社會民主組合は勞働者に三倍も多くの戰鬪的相互扶助を示してゐるのみならず、二倍乃至三倍多くの「平和的相互扶助」を興へてゐる事が全く明瞭である。社會民主組合は凡ての點に於て黒百及自由主義組合を追ひ越してゐる。其の他の優越點の外に社會民主組合は其の組合員に相互扶助の領域に於ての巨大な優越點を興へてゐる。社會民主黨に對しては相互扶助を否定し或は其の意義を不充分に評價してゐる言語する時は露はな誹謗が向けられる。社會民主組合は成長すればする程争鬪の範圍をも相互扶助の範圍をも擴大するものである。

何故に社會民主黨は組合運動に於ける相互扶助を大切にするのか？ それは二つ

の理由に依るものである。第一に、相互扶助は縱令少しばかりの改善をでも縱令勞働者の限られた群にあつても直接に之を齎らすものである。我々は一人の飢ゑたる勞働者をでも養ひ、失業や疾病に際して之を支援することが重要である。第二に、相互扶助は組合員の流入を強くして勞働組合の力を増大するものである。獨逸に於ける組合運動の統計を以てするも組合に於ける組合員の「變動」に及ぼす即ち新たに加入する組合員及脱退する舊組合員の數に及ぼす相互扶助の好影響は確實に證明されてゐる。

例へば、一八九九年から一九〇〇年に掛けて始めて獨逸金屬工組合に失業者への扶助が施行された時、又一九〇三年から四年へ掛けて製材工及煙草工組合に之が施行された時、毎年組合から脱退する組合員のパーセントは著しく低下した。其のパーセントは漸時に六六から五七%に、三八から二八%に、三九から二〇%に低下した。疾病の場合の扶助が施行された時も同様の現象がみこめられた。金屬工にあつ

ては一九〇五年から六年の間に脱退者の数は三八、七から三七、七%に低下し、木工にあつては三三、五から三二%に低下した。印刷工に失業に對する扶助が施行されたのは一八九〇年からである。之が爲に脱退者の%は段々に減少した。他の多くの組合に就ても同様である。時としては労働者が大衆をなして一の組合から他の組合に移つて行つたやうな事も見られたが、之は一に相互扶助がよく行き届いてゐたからである。獨逸に於ける鑛山労働者に就ても同様で、彼等は上記の理由に依つて鍛冶工組合に移つて行つた。

正しく制定された相互扶助は組合の力の源泉となる。其の正しくない制定は其の無力の源泉となる。

相互扶助は必要である。だが第一の順序として労働者の經濟的争闘を指導する組織としての組合の戰闘的課題と直接に相關聯せる前記の五種目を發達させなければならぬ。よく制定された戰闘的活動は相互扶助を育くむ。よく制定された相互扶

助は戰闘的活動を育くむ。組合を相互扶助の會計處に換へる事は若しくは相互扶助を組合に於ける首位に置く事は労働者の事業を害し、組合を滅ぼすことである。労働組合はどれ丈けそれが階級争闘の地盤に踏み留まりて慈善の地盤に踏み留まらず、プロレタリアットの經濟的争闘の指導をこれ丈け其の主要な課題としてゐるかといふ丈け其の名稱に植ひするものである。是は外國組合運動の理論と實際とが我々に物語つてゐる所である。

我がロシヤの労働組合に於ては相互扶助がまだ非常にまずく制定されてゐる。此の事たるや極めて容易ならざるものである。我々は歐羅巴に於ても相互扶助の鞏固な制定は割合に最近の事に屬するを見る。我がロシヤでは依然として外部の壓迫が相互扶助の制定を妨げてゐるのである。だがそれよりも重大なのは組合運動の内部的發達そのものから發生する障礙である。

相互扶助の廣汎な且鞏固な制定は莫大な資金を要する。莫大な資金の現存は次の

二條件が具備するに於て可能である。一、非常に多數の組合員及、二、充分に高い會費。我がロシヤにはまだその孰れもない。ロシヤで最も大きな組合の成員は——金屬工——七千人である。だが獨逸に於ける金屬工組合の五十萬人と比較したら此の七千人は何を意味するだらうか。會費は、勿論、組合への接近を困難にせず又組合を閉ぢ籠りたる貴族的組織に變へないやうにする爲に莫迦げて高くしてはならない。だがロシヤではまだ會費が餘りに少ない。普通の勞働者はまだその組織の爲に不斷の且巨額の物質的犠牲に訓練されてゐない。

かゝる事は多大の困難を生ずる。だが困難といふことは不可能といふことを意味しない。相互扶助を制定することは益々我が組合運動に取つて順番に置かれて行く。「戰闘的」相互扶助の重要な諸種類から始めなければならない。即ち失業者への扶助、旅費、罷業者及犠牲者への扶助から。これと並んで疾病なきの場合に於ける扶助に就て考へなければならぬ。だが之が爲には、先づ、數千及數萬の新組合員

ミキチンと納付される會費が必要である。之に際しては相互扶助を各組合を通じて集中しなければならぬ。そして各工場の會計が互に離れ離れになるやうな事態を生じないやうに努めなければならぬ。

ロシヤの組合の前には相互扶助と經濟的争闘の指導との間の相互關係に關する問題が傲然として控へてゐる。

若しも第一の相互扶助に「我慢」したとしても、第二の經濟的争闘は斷乎として追求しなければならぬ。斯くの如き組合には罷業なんぞは行へない。茲に於て、我々は奥國の勞働組合に學ばなければならぬやうに思はれる。奥國には一定の團結の自由がある。だが「浮浪」に關する條項に因つて、罷業の指導には此處でも屢々邪魔が起る。之に鑒みて、組合は形式上には組合から獨立した特別の罷業基金及組合に並行せる特別の組織を設置する。奥國では公然と法律上の根柢に於て之を行つてゐる。

我が國にはそれが無い。

相互扶助が廣く且好く制定されるのは組合が自由に全仕事の全方面を發達せしめ得る時に限る。

だが其の時まで相互扶助を延期するこゝは組合運動を阻止するこゝである。されば今は我々の力量に及ぶ限りの大きさに於て相互扶助を制定するこゝに従事しなければならぬ。此の方向に於ける努力は百倍になつて酬ひられるであらう。

だが成功の第一の條件は組合に數千及數萬の新組合員を牽引する事である。これが無ければ、我々は一所から動かないであらう。組合政策の如何なる問題を提起するにせよ、我々は先づ我が組合の成員を擴大するの必要を固持するものである。

大正十三年五月十八日印刷  
大正十三年五月二十日發行

労働黨と労働組合

定價金九拾錢



譯者	富士辰馬
發行者	山本美
印刷者	岡崎太吉
印刷所	東京市芝區田村町十五番地 岡崎印刷所

發行所

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地  
改造社

振替東京 八四〇二番  
電話高輪 四九九三番

厨川白村著	厨川白村著	賀川豊彦著	賀川豊彦著	倉田百三著	吉田絃二郎著	谷崎潤一郎著	谷崎潤一郎著
苦悶の象徴	近代の戀愛觀	太陽を射るもの 卷中	死線を越えて 卷上	超克	芭蕉	愛なき人々	愛すればこそ
最新刊	百十三版	百七十六版 (改版中)	二百八十一版 (改版中)	最新刊	十版	三十三版	百版
四六判 上製 送料 定價一圓八十錢 十七錢	四六判 上製 送料 定價二圓五十錢 十七錢	四六判 上製 送料 定價二圓八十錢 十九錢	四六判 上製 送料 定價三圓 十九錢	四六判 上製 送料 定價二圓二十錢 十七錢	四六判 上製 送料 定價一圓六十錢 十五錢	四六判 上製 送料 定價二圓 十七錢	四六判 上製 送料 定價一圓六十錢 十五錢

288

516



終

